

英国陸軍グルカ兵のダサイン
—外国人兵士の軍隊文化と集団的アイデンティティの自己表象—

上杉 妙子
(立命館大学)

**Dashain of the Gurkhas in the British Army:
Foreign Soldiers' Military Culture and Self-representation
of Collective Identity**

UESUGI, Taeko
Ritsumeikan University

This paper clarifies the way foreign soldiers represent their own collective identity through analysis of the Dashain festival held by the Gurkhas (Nepali soldiers) working for the British Army. Dashain is the biggest and the most important Hindu festival the Gurkhas celebrate. The author analyses the festival as a cultural performance demonstrating the umbrella identity and its desirable culture integrating the Gurkhas of multi-ethnic origins and various ranks. In Dashain, the Gurkha officers and the Hindu religious teacher try to demonstrate that various ethnic cultures are united under a common national culture. In order to reproduce "Nepalese culture" in the regimental context, Dashain is carefully planned by the Gurkha Major and the Hindu religious teacher, and run by making full use of the regimental rank system. Dashain shows us that the Gurkha officers construct self-representation in a way different from representation as "martial race" and that identification of the Gurkhas as Nepalese citizens is one of the elements of cohesion in the unit.

Keywords: Gurkha, military culture, Goddess, identity, Nepal
キーワード: グルカ兵, 軍隊文化, 女神, アイデンティティ, ネパール

I 序論

- 1 本稿の目的
- 2 本稿の展望
- 3 本稿の構成

II 背景

- 1 英国の国際戦略におけるグルカ兵の役割
- 2 祖国におけるグルカ兵

III 英国陸軍における対グルカ兵政策

- 1 グルカ兵の地位
- 2 現在のグルカ旅団の構成
- 3 王立グルカ・ライフル隊第一大隊の概略
- 4 採用と昇進
- 5 階級
- 6 グルカ兵の士官
- 7 宗教政策
- 8 宗教教師
- 9 駐屯地の礼拝所

IV ダサイン祭礼の進行と運営

- 1 日程と概要
- 2 ダサイン祭礼の由来
- 3 旅団がダサインを行う目的

4 名称の変更

- 5 ダサインの財政
- 6 役割分担
- 7 作業の段取り

V 集団的アイデンティティの方向付け

- 1 フールパーティー・リャーウネ儀礼に見る「伝統文化」の強調
- 2 供犠に見る「ネパール文化」の再生産
- 3 宗教教師の説教に見るグルカ兵のアイデンティティ
- 4 文化バラエティ・ショーに見る「ネパール文化」
- 5 祝福の印の授与に見る組織原理
- 6 ダサイン・カードに見る祝詞の交換
- 7 君主に対する忠誠の表象
- 8 軍隊文化としてのダサイン
- 9 民族的多様性とダサイン

VI 考察

- 1 「ネパール文化」の再生産と国民アイデンティティ
- 2 階級の儀礼としてのダサイン

VII 結論

I 序論

1 本稿の目的

本稿は、英国陸軍に雇用されているグルカ兵によって行われているダサイン祭礼を取り上げて、軍隊内部のエスニック・マイノリティが自らの集団アイデンティティを軍隊文化の中でどのように表象しているのかを報告するものである。

「グルカ兵」という言葉が指示する対象は、かつて最大の雇用主であった英国の国際戦略等の要因に応じて変化してきたが、ここでは、祖国ネパール以外の国家の軍隊・警察等において勤務するネパール王国国民として暫定的に定義し記述・分析を進めたい。本稿でいう

ところの「軍隊文化」とは、軍隊における勤務や生活の中でつくられ維持される組織や行動様式、理念などの総体をさすものとする。

「ダサイン」は、ネパールにおいて、もしくはネパール系住民によって行われているドゥルガー女神の秋の大祭の呼び名である。同種の祭りは南アジア各地で見られるが、地域により「ナヴァラートリ」「ドゥルガー・プージャー」「ダシャラー」など呼称が異なる上に、祭礼の意義や性格も多様である。ダサイン祭礼は、グルカ旅団のヒンドゥー教行事の中でも最も重要な祭礼であり、内外の賓客を招き大がかりな公式行事が行われる。

本稿の記述・分析のもととなるデータは、1997年5月から1998年1月、及び1998年6

月に英国で実施した現役グルカ兵及び英国人士官らの面接調査、参与観察、文献研究などによって得られたものである。筆者は英国陸軍の許可を得て、英国ハンプシャー州チャーチ・クルッカムに駐屯する王立グルカ・ライフル連隊第一大隊により1997年の10月に行われたデザインの参与観察とそれに関連した面接調査を実施した。

なお、本稿におけるアルファベット表記については稿末に凡例を掲げたので参照されたい。

2 本稿の展望

軍隊はその構成員である兵士のアイデンティティをめぐり、中枢部からの様々な管理や操作が実施される社会である。というのも兵士のアイデンティティを操作したり管理したりすることは、彼らの忠誠心を確保する上で重要な要素であるからである。さらに、エンローが指摘するように、古来より軍隊は政治経済的・文化的に周縁に位置する人々を少なからず動員してきた。それだけに古今東西の政策担当者たちは兵士の民族アイデンティティの管理・操作に並々ならぬ注意を払ってきたのである(Enloe 1980)。グルカ兵も例外ではなく、その民族アイデンティティをめぐっては、英国陸軍、ネパール王国政府、反英闘争運動家、反ラナ運動家、旧日本軍など様々な勢力が規制や介入をくりひろげてきた。

さて、筆者はグルカ兵に関する文献を読み進めるうちに、「グルカ兵」という言葉が指し示す範囲がコンテキストにより微妙にずれることに気がついた。ここで、英国・ネパール両国間の交渉の場において語られる「グルカ兵」と、採用や指揮の担当者によって語られる「グルカ兵=マーシャル・レイス」の差異について取り上げたい。

まず国家間交渉のコンテキストにおける「グルカ兵」について見てみよう。グルカ兵の雇用は、1816年以降、英国・ネパール両国間で取り決められる事項となった。交渉のテーブルに付くのは両国の代表であり、交渉の材料となるのは、ネパール国民としてのグルカ兵である。デ・シャンがいみじくも述べるように、グルカ兵とは、両国の「外交における通貨」であり、政権に対する英国の支援と独立の保証とを確保するために歴代ネパール政府が支払ってきた「貨幣」なのである(Des Chene 1991: 3-4)。

一方、グルカ兵のエスニシティを表現する言葉として知れ渡っているのが「マーシャル・レイス (martial race, 軍人に適した種族)」ということばである。グルカ兵を擁する英国陸軍の歩兵連隊は独特の連隊文化の存在を誇ってきたが、この連隊文化の重要な要素をなすのが、マーシャル・レイスであるとされるグルカ兵と、彼らを指揮する英国人士官との間に繰り広げられる相互行為であった。

マーシャル・レイスについて語られるようになったのは、19世紀中葉のインド大反乱(1857-1859)以降のことである。現地人兵士の反乱により多大な犠牲を払った英国は、東インド会社を解散し、植民地統治の改革に乗り出す。その結果東インド会社軍の後を踏むこととなった旧英領インド陸軍は、改革の一環として、忠誠心あつく勇敢なマーシャル・レイスの雇用とその適切な人事管理のために多くの労力を割くようになった。19世紀後半から20世紀前半にかけて刊行された各民族ごとの陸軍ハンドブックは、以上述べてきた軍隊改革の成果ともいえるものであり、マーシャル・レイスの分布や生育環境、人格的特徴、社会文化等、人事管理上の留意すべき事柄について詳説をしている¹⁾。これらのハ

1) デ・シャンによれば、特定のマーシャル・レイスについて書かれた最初の陸軍ハンドブックは、イーデン・ヴァンシッタート著『グルカについての覚え書き (Notes on Goorkhas)』(1890年刊行) 。

ンドブックの叙述は20世紀に入ってから、現地人兵士の採用及び人事管理の指針となっていた。また、英国人士官の著す回想録や連隊史の叙述にも大きな影響を与え、グルカ兵に関する一般世論が抱くイメージを長期にわたって固定することともなった。というのも、退役英国人士官は、軍記物の書き手もしくは読者層として、英国出版界においては無視できない勢力であるからである。

ではマーシャル・レイスとしてのグルカ兵の表象はどのようなものであったのか。

まず第一に、採用担当士官が求める「真のグルカ」とは、「軍人に適した諸氏族 (martial clans)」の者であると同時に、ネパールの丘陵地帯の出身者であるという (Gibbs 1944: 5-6)。というのも山村の厳しい環境の中で生育するからこそ理想的な兵士となるとされていたからである。その理論的背景には、どの民族にもステレオ・タイプとしての人格・資質があり、それは血統と先祖代々の生育地の環境により決定されるとする考え方があった。

第二に、「真のグルカ」は必ずしもネパール国民 (臣民) とは一致しなかった。陸軍ハンドブックをもとにグルカ兵についてのより簡潔な概説書をまとめたギブズ少佐は、いみじくも述べている。「ネパール国民のすべてがグルカと言うわけではない。またネパール臣民 (Nepalese subjects) でないグルカが何千といる」 (Gibbs 1944: 5)²⁾。さらにギブズは、「グルカにとってネパールとはカトマンズ盆地を意味する。盆地の外から来たグルカ兵は『自分は丘陵地の出身であり、ネパールの出身ではない』と常に言うであろう」と述

べる (Gibbs 1944: 1)。ギブズはまた、「ネパール臣民」でないグルカの例として、ダーズリン、シッキム、ブータン、アッサム、ビルマなどの各地に住むグルカや、グルカ連隊の駐屯地で生まれたグルカなどを挙げている (Gibbs 1944: 5)。二つの世界大戦時には、必要に迫られてダーズリン、シッキム、ブータンなどに移住していた人々からも採用していたという (Gibbs 1944: 6)。ハットによれば、ネパール国内におけるグルカ兵の徴募を長年妨害されていた英国は、ネパール国外への移住を奨励していたという (Hutt 1997: 113)。これも「真のグルカ」がネパール国民と必ずしも一致しなかった一つの歴史的要因であるといえる。

第三に、カプランが指摘するように、グルカ兵のステレオタイプは、インド大反乱の主力となった平地のヒンドゥー教徒について語られるそれとはあらゆる点で対極に位置するものであった (Caplan 1995: 87-121)。例えば、英国の弁理公使 (Resident) としてカトマンズに滞在したホジソンはグルカ兵を、快活で冒険を好み、ヒンドゥー教の些末な儀礼作法にさほど拘泥せず、高カーストの兵士の「パリサイ人的 (偽善的) な厳格さ」を哄笑し、低地の人々を軽蔑する兵士として描いている (Hodgson 1833: 40-41; 1972 [1874]: 37-39)。この記述自体はインド大反乱よりも20年以上も前に書かれたものであるが、後にヴァンシタート中佐の著した陸軍ハンドブックに引用され、さらに旧英領インド陸軍の官僚であったメイソンによる歴史書の中にも再引用されている (Mason 1974: 355)。英国人将校の回想録や連隊史においても、勇敢、

2) である (Des Chene 1999: 124)。ただし、陸軍ハンドブックには「ドグラ人」「シーク教徒」など、厳密には民族とは言い難いカテゴリーを対象としているものもある。

2) 別の箇所ではギブズは、ネパール国外に住むグルカの数に数十万人であると述べている (Gibbs 1944: 6)。

3) 1919年に刊行された「少年のための帝国年鑑 (Empire Annual for Boys)」におけるグルカ兵についての記述は、そのよい例である (Caplan 1995: 7)。

忠実、インド現地人を軽蔑するが英国人には敬服、誇り高く独立心旺盛、正直、ユーモアのセンスがありスポーツを愛好するといったステレオタイプが繰り返し語られ、そのイメージが巷間においても流通してきた³⁾。このことは、「セポイの反乱」後の英国のヒンドゥー教徒に対する不信感や、グルカ兵が英国の植民地統治において果たしてきた役割と無縁ではなからう。デ・シャンやカプランも指摘するように、グルカ兵の表象は、英国や英連邦諸国の海外戦略においてグルカ兵が果たす役割と密接に結びついていたと見るべきである (Caplan 1995; Des Chene 1991)。

要するに、軍事的観点から必要とされ採用や指揮の現場で語られてきたのは、このマーシャル・レイスとしてのグルカ兵であり、ネパール国民ではなかった。また、グルカ兵はインド大反乱の主役となったインド低地の高カーストの人々とは対極に位置する人々として表象され、その結果、熱狂的なヒンドゥー教徒ではないとして描かれもしてきたのである。

では、グルカ兵自身は他者によってつくられたこのような表象に対してどのような態度をとっているのだろうか。

先行研究は、グルカ兵と英国人将校の価値観や見解との間に乖離があることについて、ある程度明らかにしている。例えば、「臆病者であるくらいなら死んだ方がましだ [kāphar hunu bhandā marnu rāmro]」というネパール語の言葉はグルカ兵のモットーとして、たびたび英国人士官の回想録等に引用される言葉であるが、ある退役グルカ兵は「死ぬくらいなら利口でいた方がましだろ」と茶化したとデ・シャンは伝えている (Des Chene 1991: 239)。また、カプランも、グルカ兵の特質とされる「勇気」に対し、退役グルカ兵らは知性を伴わない特質であるとして、シニカルに眺めていると報告している (Caplan 1995: 135-140)。一方、ハットはグルカ兵に題材をとったネパール語文学の分析

を通して、祖国ネパールにおけるグルカ兵のイメージが英国人一般に抱かれているそれとは大分異なることを示した (Hutt 1993)。

その一方でグルカ兵自身が、期待されるグルカ兵を演じ、「マーシャル・レイス」という表象の維持に加担してきたことも指摘されている。たとえば、デ・シャンは、グルカ兵が、植民地主義的意図と一致し、かつ植民地における歴史編纂と整合するようなやり方で行動したために、英国人は自分たちがグルカ兵を正しく叙述し、かつ彼らの動機を理解していると思ひこむに至ったと指摘している (Des Chene 1991: 9)。また、カプランはグルカ兵の志願者たちが英国陸軍の求めるグルカ兵のステレオタイプを熟知しており、面接試問の際にそれに「つけこむ」と報告している (Caplan 1995: 101)。「マーシャル・レイスの理論は単なる植民地主義的想像が作り出した虚構ではない—もしそうならば戦略として成功しなかつただろう」とするオミッシの指摘は一面真実であろう (Omissi 1998 [1991]: 108)。しかし、オミッシのいう「成功」の背景には、政治経済的に強い立場にある者が構築する表象に合わせる、弱者が自らの現実を構築していくという、おきまりの過程があることを見逃してはならない。

一方、ネパール人としてのグルカ兵のアイデンティティについて、言及する先行研究もある (Cohen 1971; Ragsdale 1989; Whelpton 1997)。中でもラグズデイルは、旧英領インド政府とネパール政府とが協力して、グルカ兵がインドとは別個の国家であるネパールの市民であると自分を見なすように、注意深く教え込んできたこと、指摘している (Ragsdale 1989: 49)。その際、国民意識のもっとも重要な要素であったのが、ネパール語とカースト規範の採用であったというのである (Ragsdale 1989: 49-50)。しかし、ラグズデイルの指摘は旧英領インド陸軍当時に関するものであり、かつ、詳しい叙述をとまなっていない。

以上見てきたように、先行研究は、他者によるグルカ兵の表象について、その内容と制度的背景、グルカ兵自身の認識との齟齬について、ある程度明らかにしてきた。しかしながら、グルカ兵自身の主導により構築される集団アイデンティティの内実や表象、涵養の過程についてはほとんど明らかにされてこなかったといつてよい。特に、ネパール人としてのグルカ兵のアイデンティティについての解明はほとんど手つかずである。筆者は、ネパール人男性から、グルカ兵が愛国心の強い人々であるとネパールでは見られていると、聞いたことがある。英国にとってのグルカ兵があくまでも外国人兵士である以上、彼らの国民アイデンティティのあり様は、彼らの社会的アイデンティティ研究の一つの焦点となつてしかるべきであると筆者は考える。

そこで、本稿では、現役グルカ兵自身による集団的アイデンティティの自己表象のあり方を明らかにしたいと考える。そのための方策として、王立グルカ・ライフル隊第一大隊のダサイン祭礼を取り上げる。そのパフォーマンスや裏方作業の進行を分析することにより、グルカ兵の集団的アイデンティティが公的な場面においてどのように表象されるのかを明らかにしようというのが、筆者のもくろみである。

本論でダサイン祭礼に焦点を当てる理由は以下の四点である。第一に、この祭礼はグルカ兵らによって企画・運営されるため、グルカ兵が自らの軍隊文化をどのように構築し、集団アイデンティティを表象するのかを探る、絶好の機会である。第二に、その定型化された行為や、役割分担、長年にわたって構築された知識の中に、連隊におけるリーダーシップや軍隊文化の構築を観察することが可能であるからである。第三に、この祭礼はグルカ連隊最大の公式的宗教行事であり、内外の賓客を招いて盛大に行われる。すなわち、この行事は英国陸軍に認められたパフォーマンスなのであり、軍隊の民族政策と連動した

集団的アイデンティティのあり方を探る上で好都合であると思われるからである。第四に、ネパール国内において行われるダサイン祭礼が国家主義的傾向をもつことは、すでに指摘されている（例えば Pfaff-Czarnecka 1993, 石井 1992）。石井はカトマンズの旧王宮において行われているダサインについて報告し、その行事が現王朝による「征服の軌跡をたどるもの」と分析している（石井 1992: 78）。多数のグルカ兵を輩出してきたグルンの人々の村でも、ダサインの折りにネパール国王の名において祝福が与えられることが報告されている（Messerschmidt 1976: 71）。そのため、ネパールの民族運動家の中には、ダサインを支配者側にたつ高カースト・エリートによる抑圧の象徴であるとする者さえもある（Pfaff-Czarnecka 1997: 442）。その意味でダサイン祭礼は、国家との関連からグルカ兵の集団的アイデンティティを見る上で適した行事であると考えられる。

グルカ兵のダサイン祭礼については、陸軍ハンドブックや英国人士官の回想録などがその概要を報告してきた（例えば、Cross 1986; Farwell 1984; Forbes 1964; Ministry of Defence 1965; Morris 1936 [1933]; Mullaly 1957; Vansittart 1890; 1915; Woodyatt 1922）。これらの報告は、祭礼の由来として古代インドの叙事詩を紹介したり、ダサインの華やかな楽しさなどについて述べている。また中には、武器を礼拝する儀礼を取り上げて、「兵士という職業の本質的な価値に対してグルカが抱いている確乎たる信念を示すもの」などと論評し、軍隊の儀礼としてダサインを評価するものもある（Mullaly 1957: 443）。しかしながら、詳細な民族誌的報告や集団的アイデンティティに注目した分析は管見ではない。このような状況に鑑み、本稿ではダサイン祭礼を取り上げ、より詳しい報告を提供するとともに、集団的アイデンティティの表象のあり方を明らかにしたいと考える。

最後に、本稿は以下の五つの研究分野にお

いて貢献できるものと期待できる。

第一に、国民によって構成される常備軍を主力とする現代の軍制においては、愛国心は兵士の士気を高める一つの重要な要素である。ならば、祖国に対する国家志向を保持する外国人兵士を組み入れているということは、特異な現象でさえある。また、グルカ兵は祖国への帰属が雇用先の軍隊における地位に少なからず影響を与えているという点で、世界各地に見られる傭兵とは一線を画す存在である⁴⁾。その意味で本稿は、兵士の動機付けに関する研究分野において、通常の正規兵や傭兵研究からでは得られない地平を開くものであると考えられる。

第二に、自身が元グルカ兵の息子であるネパール人地理学者・政治家ハルカ・グルンは、グルカ兵が高収入を伴う役割モデルを提供し、汎ネパールの価値をエスニック・コミュニティに導入する重要なエージェントとなったと述べている (Gurung 1996: 504)。してみると、グルカ兵の国家志向のあり方を明らかにすることは、多民族国家が国民文化を発展させていく途上で、列強の植民地戦略ならびに移民・出稼ぎなどの「ネパール人のディアスポラ」がどのようなインパクトを与えたのかを検討する、材料を提供することとなる。

第三に、先行研究は、ドゥルガー女神の大祭が、コンテキストによっては王権や軍隊と密接な関連をもつことを明らかにしてきた。たとえば、永ノ尾 (1993) によれば、5世紀から11世紀までの間に成立したと見られるヴィシユスダルモッタラ・プラーナ文献には秋の女神の大祭において武器の礼拝をすることが述べられ、また6世紀後半に成立したと見られるデヴィー・プラーナ文献ではねり粉でつくった敵の像の破壊などが記述されているという。また、横地は、悪魔と戦うドゥル

ガー女神についての信仰が5世紀後半の軍事行動の活発化と結びついて成立したと示唆している (横地 1993: 107-108)。さらにフラーは19世紀前半にメーワールの王室で行われていたナヴァラートリと1930年代にマイソールの王室で行われていたダシャラーを、王権の儀礼として取り上げている (Fuller 1992: 106-127)。これらの儀礼においては、武器や王権を象徴する象や馬などを礼拝の対象としていた (Fuller 1992: 116, 120)。また、第10日は開戦するのに幸先のよい日であるとみなされており (Fuller 1992: 113, 120)、その翌日には王による閲兵も行われた (Fuller 1992: 114)。一方、同じメーワール地方で1990年に行われたノーラトリ祭礼を分析した三尾 (1994) は、藩王国の消滅とそれに続く政治経済的变化が王権の儀礼的要素を欠落させたこと、指摘している。このように、従来の研究は祭礼と伝統的王権との密接な関連を明らかにしてきた。本稿はそれに対し近代軍隊における伝統の維持と再生産という観点からこの方面の研究に貢献できると考えられる。

第四に、ヒンドゥー王国としての国家統合を目指す多民族国家ネパールにおいては、エスニシティに関する議論は、以前は統合を妨げるものとして見なされがちであった。しかし1990年の政変以来、言論や政党活動の自由が認められ、民族文化の復権を求める勢力が活気づいており、国家的統合を訴える勢力と対立している。前者の中には多民族構成を考慮した国民文化の再定義を求めている者もあるという (Pfaff-Czarnecka 1997: 445)。社会経済的に恵まれない民族の出身者が多いグルカ兵の動向を押さえておくことは、この多民族国家の政治統合の今後の展開を占う一つの材料となるはずである。

最後に、現在ネパールでは、英国陸軍にお

4) 後でも述べるが、英国陸軍はグルカ兵は傭兵ではないという立場をとっている。

けるグルカ兵の待遇や、1999年にユーゴスラビア・コソボ自治州及びインド・パキスタン国境に派遣されたグルカ兵の戦死をめぐる、外国陸軍におけるグルカ兵雇用の是非を問う世論が沸騰している。この議論とそれに対する英国側の反応は、開発援助や低開発国の国民の出稼ぎにまで及んでいる。論争の一方の当時者でもあるグルカ兵の集団アイデンティティのあり方を明らかにすることは、「南」側の人々が南北問題をどうとらえるのかを考えていくための一つの実例を提供することにもなる。

3 本稿の構成

本稿は以下の構成をとる。まず第二章では、グルカ兵が英国の国際戦略で果たしてきた役割やグルカ兵をめぐる英国ネパール関係、祖国におけるグルカ兵の社会的な位置など、本稿の叙述の背景となる事柄について簡単に述べる。

続いて第三章では英国陸軍における対グルカ政策の概要について述べる。具体的には組織編成、階級体系、待遇、宗教政策などについて記述する。

第四章では、ハンプシャー州チャーチ・クルッカムに駐屯するグルカ旅団王立グルカ・ライフル隊第一大隊により1997年10月に催されたダサインを取り上げ、ダサインの進行や運営のし方について、記述する。第五章ではいくつかの儀礼等を取り上げ、グルカ兵の集団的アイデンティティがどのように方向付けられるのかという観点から記述と分析を行う。第六章ではそれまでの記述にもとづいて、祭礼の考察を行う。

II 背景

1 英国の国際戦略におけるグルカ兵の役割

かつて「日が沈むことのない」と言われた広大な大英帝国を維持するために、英国は各地で現地人兵士を雇用してきた。英国陸軍が

採用した現地人兵士の中でも最後まで残ったのがグルカ兵である。

グルカ兵の父祖たちは、14世紀から18世紀にかけてカトマンズ盆地を支配したマッラ王朝や、現在のネパール王国を築いたシャハ王朝の軍隊において、兵士として働いてきた(Caplan 1995: 13-14)。「グルカ」という名称はシャハ王朝の発祥の地である「ゴルカ」という町の名に由来しているという(Vansittart 1915: 46; 石井1992: 214)。

グルカ兵が英国人のもとで軍務に服するようになったのは、公式的には1816年以降であるとされており、グルカに関する多くの書物がそれを前提として書かれている。当時、領土を拡張しつつあったゴルカ王国(現在のネパール王国シャハ王朝の前身)と東インド会社の利害とが衝突し、英国ネパール戦争(the British-Nepalese War, 1814-1816)へと発展した。この戦争において東インド会社軍はかろうじて勝利を収め、グルカ兵を雇用することについての公式的合意をゴルカ王国からとりつけた。英国側の公文書等では、グルカ兵の雇用は、英国ネパール両国軍が相手の戦闘能力に対する敬意を抱いたことから始まったと、美化されて述べられるのが普通である(例えばHouse of Commons 1989: x)。が、グルカ兵の雇用の目的の一つは、ゴルカ王国の勢力をそぐことであつたともいわれている(Des Chene 1991: 1-2)。以来、グルカ兵は、少なくとも180年以上にわたり、旧大英帝国及び英連邦の領土と政権、利害の防衛などに携わってきた。

グルカ兵が、その武勇と忠誠心とを軍関係者に印象づけたのは、インド大反乱(1857-1859)の制圧で勲功を立ててからのことである。インド大反乱以後、英領インド陸軍の採用担当者や政策立案者らは、兵士の反乱の再発防止のために軍隊の改革に乗り出す。グルカ兵は、ムスリム(イスラーム教徒)、シーク教徒、パンジャブ人らとともに、忠実かつ勇敢な「マーシャル・レイス」として

認定され、その後雇用が拡大していくこととなる。1857年には「グルカ」という言葉を冠した部隊が設立されている。1858年に東インド会社が解散した後は、旧英領インド陸軍の正規兵として徐々に地位を確立し、植民地における治安維持活動や地域紛争における戦闘行為等に携わることとなった。

一方、ネパールは英国ネパール戦争後、グルカ兵の雇用が合意されてからもしばらくは、兵士の募集に非協力的であり、時には妨害さえもした。

しかし、インド大反乱後、グルカ兵に対する需要が高まり、グルカ兵をめぐる英国ネパール関係はいわば「売り手市場」の様相を示す。英国は、グルカ兵雇用をめぐる協力を取り付けるべく、ネパール国王に代わり実権を握っていたラナ家の首相たちを、贈り物などにより懐柔していく。

その結果、1885、1888年にはグルカ兵への応募を促す政令が、ネパールの首相ビール・シャムシェル・ラナにより布告される (Izuyama 1999: 53)。1901年にネパールの首相となったチャンドラ・シャムシェル・ジャン・バハードゥル・ラナの在職中には、グルカ兵予備兵の帰国の許可、第一次世界大戦における対英全面的協力など、一大転換点を迎えることとなった。その後勃発した第一次世界大戦では、ネパール政府は英国に対し物資の提供、経済的援助、グルカ兵の大量動員、ネパール軍兵士の貸与などで協力した (Banskota 1994: 126, 134; 西澤 1985: 107)。このような外交努力の結果、1923年友好条約が結ばれ、ネパールは念願の独立国としての確認を英国から取り付けることができた。

英国ネパール関係の変化の背景には、英国に協力することにより自国の独立を守っていくとする、ネパール側の対英政策の転換がある。また、英国にとっても、中国と英領インドの間の緩衝地帯としてネパールの存続をはかることは有益となった。さらに反体制派の取り締まりという点において、ネパールの

為政者と英国は共通の利害を持つこととなる。両国の利害の一致という状況下で、英国側の旺盛な需要に対して、ネパール側も積極的に応えるという蜜月時代が幕を開く。

第一次世界大戦においては20万人のグルカ兵が軍務に服し、そのうち2万人が死傷している (House of Commons 1989: x)。第二次世界大戦においては実に25万人が動員され、うち7,544名が死亡、1441名が行方不明、23,655名が負傷した (House of Commons 1989: x)。

1947年にインドとパキスタン・イスラーム共和国とが分離独立する際には、グルカ兵の雇用に関する三国間協定が英国、ネパール、インドの間で取り決められた。グルカ兵は、英国とインド共和国の両国の陸軍に雇用されることとなり、旧英領インド陸軍の10個連隊はインドに6個、英国に4個連隊へと分割された。また、英国陸軍のグルカ兵の給与をインド陸軍のグルカ兵のそれに準ずるものとするなどが決められた。それと平行してヒンドゥー教司祭を宗教教師として引き続き雇用することなど、グルカ兵の宗教に関する事項も確認されたのであった。

インドとパキスタンの分離独立後も、英国は、パレスチナにおける戦役のほか、マラヤ共産党の鎮圧 (1948-1960) やマレーシア連邦 (当時) とインドネシア共和国の国境紛争など、東南アジア各地に勃発した紛争に介入するために、再びグルカ兵を必要とした。特にボルネオやマラヤの密林におけるマラヤ共産党との戦いでは、グルカ兵はゲリラ戦における優れた能力を遺憾なく発揮し、新たな形でマーシャル・レイスとしての勇名をとどろかせたのであった。また、ブルネイが英国保護領であった1962年に起こった反乱では、シンガポール駐在中のグルカ連隊の1大隊が反乱の鎮圧にあたり、それ以来、同国の要請により、1大隊が駐屯している (House of Commons 1989: xxii)。

ボルネオにおける軍事行動の終了後、1971

年にはグルカ兵の本部はマラヤから香港に移される。その後、1997年に香港が中華人民共和国に返還されるまで、グルカ兵の大多数は香港・中国間の国境警備、主に不法移民の取り締まりにあっていた。近年ではフォークランド紛争(1982)、湾岸戦争(1990-1991)に派兵されている。また、欧米においても、ボスニアにおける国連保護軍(the United Nations Protection Force)や北大西洋条約機構軍の支援活動を行うなど、新しい派兵先も加わった。グルカ兵が派兵されていないのは北アイルランドのみである。

しかしながら、ボルネオでの作戦終了後、特に1980年代後半以降、グルカ兵の雇用には不確定的な要素が見られる。その第一の要因は、英国を取り巻く国際状況の変化による軍事戦略の見直しである。東西冷戦の終結、香港返還などによる海外植民地の縮小、及びイギリスの国際戦略の重心が東方から欧米へと移動したことなどの諸要因により、英国陸軍は1991年より徐々に25パーセント程度の減員を実施した。グルカ兵も例外ではなく、陸軍全体の削減率を上回る率で削減された。1988年の時点では8千人弱のグルカ兵が雇用されていたが(House of Commons 1989: xiii)、1997年12月の時点では約3,400名となっている。

2 祖国におけるグルカ兵

グルカ兵の祖国ネパールは憲法においてヒンドゥー王国であると宣言している。一方、グルカ兵を構成する諸民族は、宗教的には、ヒンドゥー教に改宗した者が多いが、仏教徒などの非ヒンドゥー教徒もまた少なからず含んでいる。1854年に制定された法典ムルキ・アインでは、グルカ兵を多数輩出してい

るマガールとグルンを、「奴隷にすることのできない飲酒者[namāsīnyā matwali]』としており、「聖紐の着用者[tāgādhāri]』とされる諸カースト(司祭カーストや戦士カースト等)の下に位置する集団として、位置づけている(Höfer 1979: 45)。政治的にも、司祭カーストや戦士カーストに属する人々が優越した地位についてきた。

しかし、退役グルカ兵の中には、兵士としての勤務によって得られた給与や年金を原資として、土地を購入したり新興企業家として活躍し、地方の実力者となるものも多いことは、すでに先行研究が指摘する通りである(例えばCaplan 1970)。

現役グルカ兵らはいずれもファーフ・ツアルネッカが「パンチャーヤット時代(1951-1990)」と呼ぶ時代に生まれ育って入隊してきた人々ばかりである⁵⁾。「パンチャーヤット時代」とは、国王がラナ家の首相から政権を奪還し、国王の主導のもとに中央集権化と近代化が進んだ時代である(Pfaff-Czarnecka 1997: 433-434)。この時期には憲法の下での国民の平等が保証されたが、一方で、ネパール語学校教育、シャハ王家発祥の地の民族衣装を原型とするネパール服の普及などの同化政策が推進された(Pfaff-Czarnecka 1997: 433-434)。つまり現職のグルカ兵たちはいずれも、国民国家としての諸制度の整備により、成熟した国民文化と文化的一体感が全国的に形成されつつある時期に生まれ育ったことになる。さらに、一定の学歴要件を満たすことは、グルカ兵に出願するための資格の一つである⁶⁾。それだけに彼らは国民文化形成の影響を少なからず受けてきたと思われる。

5) パンチャーヤットとは南アジアに広く見られる自治組織であるが、ネパールにおいては1959年に制定された行政・立法制度のことを指す。

6) 特にグルカ兵の子女の学歴は比較的高い。グルカ兵とならない子女の中には、大学教員や弁護士、ジャーナリストになるものもある。

III 英国陸軍における対グルカ兵政策

1 グルカ兵の地位

一般には英国陸軍のグルカ兵は傭兵 (mercenary) として言及されることが多いが、公式的には英国陸軍の正規兵 (regular soldier) であるとされている (House of Commons 1989: xxi)⁷⁾。ネパール政府も、インド・英国両国陸軍によるグルカ兵雇用の条件として、グルカ兵が傭兵として見下されないことを要求し、それが1947年の三国間協定においても盛り込まれた (Symon 1947)。

とはいうものの、外国籍の兵士の雇用が微妙な問題を抱えていることに変わりはない。

インド独立後のグルカ兵の処遇をめぐる協議の席上、グルカ兵は第一に何に対して忠誠を要求されるのかと問うネルー首相に対して、英国陸軍のモンゴメリー元帥は、グルカ兵は英国陸軍の軍紀の下にあるが、第一の忠誠はネパールにあるのであり、この忠誠を妨げるようなことはなされ得ないし、なすべきでもないと答えている (Nehru 1947)。

一方で、グルカ兵が所属する英国陸軍の統帥権は英国女王に存する (Queen's Regulations for the Army 1975 Revised Edition 1995: 1-1)。採用試験に合格した新兵は、宣誓パレードにおいて、英国国旗の上に右手を置いて英国女王とその官吏とに忠誠を誓う。ネパール国王には忠誠を誓わない⁸⁾。

したがってグルカ兵にとっては統帥の主体

と忠誠心の向かう最終的方向とがずれることになる。

ただし三国間協定においては、グルカ兵がヒンドゥー教徒に対して用いられないことが約束されている (Symon 1947)。また現在の英国・ネパール間関係はおおむね良好である。グルカ兵の忠誠心が二つの国の間で引き裂かれるような事態はまずないものと思われる。

2 現在のグルカ旅団の構成

以下は1997年10月現在のグルカ旅団を構成する主な部隊の名称である。総人員数は約3,400名である。歩兵と特殊兵科に大別される。なお、グルカ旅団はどの師団からも独立した旅団であるが、作戦上の単位ではなく、管理上の部隊であり、各部隊はめいめいが割り当てられた編成を指揮する士官の指揮下につく (House of Commons 1989: lvi)。

- (1) グルカ旅団本部 (Headquarters Brigade of Gurkhas)
- (2) 駐ネパール英国グルカ隊 (British Gurkhas Nepal)
- (3) グルカ訓練団 (Gurkha Training Wing)
- (4) 王立グルカ・ライフル隊 (Royal Gurkha Rifles)
 - 王立グルカ・ライフル隊第一大隊 (1st Battalion The Royal Gurkha Rifles)
 - 王立グルカ・ライフル隊第二大隊

7) 英国は1949年のジュネーブ協定の付随書第47条第2項における傭兵の定義に依拠してグルカ兵が傭兵ではないと主張している (House of Commons 1989: xxi)。この定義における傭兵の条件のうち、グルカ兵が当てはまらなると英国が解釈しているのは以下の三点である。

(1) 武力紛争において戦闘を行うために、その地域内もしくは地域外において特別に雇われること。(ジュネーブ協定の付随書第47条第2項の小段落a)

(2) 紛争当事者の軍隊における同等の階級及び職務の戦闘員に約束されるか支払われるかするものよりも実質的に多い物質的報償が、紛争当事者によりあるいはその代理人により約束されていること。(同上の小段落cの後半部)

(3) 紛争当事者の軍隊の成員ではないこと。(同上の小段落e)

8) なお、ラグズデイルによれば、旧英領インド陸軍当時、グルカ兵はネパール国王及び当時実権を握っていたラナ家の首相に対しても忠誠を誓っていたという (Ragsdale 1989: 53)。

- (2nd Battalion The Royal Gurkha Rifles)
- (5) 特殊兵科部隊 (Corps Units)
女王グルカ工兵隊 (Queen's Gurkha Engineers)
女王グルカ通信隊 (Queen's Gurkha Signals)
女王グルカ輸送連隊 (Queen's Own Transport Regiment)
- (6) グルカ実演中隊 (Gurkha Demonstration Company)
サンドハースト王立陸軍士官学校グルカ実演中隊 (Gurkha Demonstration Company The Royal Military Academy Sandhurst)
ウェールズ歩兵訓練中央部隊グルカ実演中隊 (Gurkha Demonstration Company The Infantry Training Centre Wales)
- (7) 高級副官付き軍団第28陸軍教育中央部隊 (教育及び訓練予備隊) (28 Army Education Centre Adjutant General's Corp (Educational and Training Support))
- (8) 歩兵配置及び兵籍管理局第二兵士団 (グルカ) (Soldier Wing 2 (Gurkha), Infantry Manning and Career Management Division)
- (9) グルカ旅団軍楽隊 (Band of the Brigade of Gurkhas)

このほかに旅団からは独立した三つの中隊が1996年11月に編成され、以下の通り、2000年までの年限で、定員が不足している他旅団の大隊に配属されている。

- (1) パラシュート連隊第二大隊グルカ増援中隊 (Gurkha Reinforcement Company 2nd Battalion The Parachute Regiment)
- (2) 王立スコットランド隊第一大隊グルカ増援B中隊 (Gurkha Reinforcement 'B'

- Company 1st Battalion The Royal Scots)
- (3) 皇太子妃王立連隊第一大隊グルカ増援中隊 (Gurkha Reinforcement Company 1st Battalion The Princess of Wales Royal Regiment)

また、グルカの部隊ではないが、陸軍人事中央部隊 (Army Personnel Centre) 等にもグルカ兵が若干配属されている。

なお、英国陸軍とは別枠で1000人を越えるグルカ兵がシンガポール共和国警官隊グルカ分遣隊として雇用されている。

3 王立グルカ・ライフル隊第一大隊の概略

ここで本論が分析対象とする資料を得た王立グルカ・ライフル隊第一大隊 (以下、第一大隊) の組織について、概略を述べたい。第一大隊は、1994年に第二エドワード七世グルカ・ライフル隊、第六エリザベス女王グルカ・ライフル隊の二つの連隊 (以後、旧第二連隊、旧第六連隊としてそれぞれ略記) の縮小合併により創設された部隊である。第一大隊は1997年6月30日の香港返還に先立ち、1996年11月にその大半が英国に帰国した。現在、ハンブシャー州チャーチ・クルックムに駐屯している。第一大隊の人員は約800人である。

第一大隊は本部付き中隊 (Headquarter Company) とライフル中隊 (rifle company) 3隊、射撃予備中隊 (fire support company) 1隊から構成される。本部付き中隊には諜報部や軍楽隊などの専門的な職種スタッフ配属されている。ライフル中隊と射撃予備中隊の人員はそれぞれ約140名である。三つのライフル中隊の名称はA中隊 (A Company, 以下同様)、B中隊、C中隊である。中隊はさらに小隊 (platoon) に分かれる。

大隊の長は大隊指揮官 (Commanding Officer) であり、原則として中佐が任命される。大隊指揮官にはこれまで英国人士官が任命されてきたが、1995年に初めてグルカ

兵出身者が任命された。

歩兵中隊は、英国人士官（1名）及び女王グルカ士官（5名）、「グルカのその他の階級」（次ページ参照）の兵士から構成される（House of Commons 1989: xxxviii）。が、現在では女王グルカ士官が中隊長となることもめずらしくはない。なお、女王グルカ士官はグルカ兵の士官の一種別であり、後に詳述する。

第一大隊では兵士のほかにネパール人軍属が雇われている。そのうち、宗教教師（religious teacher, 128 ページ参照）と金細工師は、それぞれその職業に対応したカーストの出身者、すなわちブラーマン（Brahman）とスナール（Sunar）に属するネパール人が雇われている。

4 採用と昇進

グルカ兵として採用されるためには、ネパール国籍を持つことが必要である。つまり、ネパールの特定の郡（ジッラー [jillā]）より与えられた市民権を持っていることが必要条件となる。また年齢制限は17.5歳から22歳までである（House of Commons 1989: xxvii）。実際には17歳ないし18歳で入隊する新兵が多いという。

グルカ兵は普通集団（general group）と高学歴集団（educated group）に分けて採用される。

普通集団とは主に歩兵として配属される人々であり、原則としてその民族的出自により東ネパールと西ネパールに分けて採用され、入隊後の所属も東ネパールの出身者は第二大隊に、西ネパール出身者は第一大隊に配属されることになる。グルカ兵の士官や下士官からなる採用担当者が、それぞれの担当地域でこれと思う若者に声をかけて選抜試験を受けさせる（House of Commons 1989: xxvii）。普通集団として採用されるための学歴は、ネパールの学校教育において8学年（Class 8）

を修了していることが必要となる。王立グルカ・ライフル隊の場合、採用試験においては知能検査、身体検査、適性検査、体力検査、ネパール語での面接、英語などの科目が課されている。

歩兵として採用する民族は限定されている。旧第六連隊の指揮官であったコレット中佐は、グルカ兵の「同質性」を維持するために「軍人に適したカースト（martial jats）」を雇用するという「伝統的政策」を続けていると述べている（Collett 1994: 99）。コレットのいう「好戦的なカースト」とは、西ネパールでは、グルン（Gurung）とマガール（Magar）、タクリ（Thakuri）、若干のタマン（Tamang）、タカリ（Thakali）であり、東ネパールでは、リンブー（Limbu）、ライ（Rai）、スンワール（Sunwar）、グルン、タマンである（Collett 1994: 99）。実際にはそのほかにチェトリ [kṣatri] も雇用されている。タクリ、チェトリは戦士カーストであり、人種としてはアーリア系である。その他はモンゴロイド系の民族である。現在では民族別統計が取られていないため、民族別採用者数は不明であるが、グルカ兵の9割弱がモンゴロイド系民族の出身であると言われている。

一方、高学歴集団とは特殊兵科部隊の三つの大隊に属する人々であり、高等中学校の最終学年である10学年修了時に受ける卒業試験（School Leaving Certificate）に合格していることが必要である。高学歴集団の場合には普通集団とは異なり、地理的・民族的分類は関係なく、新聞広告などを用いネパール全土から一括して募集している。

5 階級

旧英領インド陸軍においては現地人士官（native officer）独自の階級名が用いられていたが、第二次世界大戦後は英国人将兵とはほぼ同じ階級名が用いられている⁹⁾。グルカ兵

9) 旧現地人兵士の階級名についてはファーヴェル（Farwell 1984: 293-294）やコーエン（Cohen 1971: ➤

の階級は、ライフル銃兵 (Rifleman) から始まり、勤務伍長 (Lance Corporal), 伍長 (Corporal), 軍曹 (Sergeant), 特務軍曹及び軍旗護衛下士官 (Staff Sergeant 及び Colour Sergeant, 両者は同格), 二級准尉 (Warrant Officer Class 2), 一級准尉 (Warrant Officer Class 1), 中尉 (Lieutenant), 大尉 (Captain), 少佐 (Major), 中佐 (Lieutenant-colonel) というように続いていく。伝統的にグルカ兵がつくことのできる最高の役職であるグルカ長 (Gurkha Major) の階級は少佐である。なお、「グルカ長」とは Gurkha Major の筆者による試訳である。

士官 (officer) は通例、少尉 (Second Lieutenant) 以上であるが、グルカ兵の場合少尉という階級がないため、中尉以上が士官ということになる。士官以外は「グルカのその他の階級 (Gurkha Other Rank)」と総称されている。下士官 (Non-commissioned Officer) は勤務伍長から特務軍曹ないし軍旗護衛下士官までの範疇であり、そのうち軍曹と特務軍曹および軍旗護衛下士官は上級下士官 (Senior Non-commissioned Officer) と呼ばれている。

6 グルカ兵の士官

グルカ兵の士官は、英国人士官と「グルカのその他の階級」の仲介者としての役割を果たすものとして位置づけられている (House of Commons 1989: lviii)。彼らは、英国人士官同様にサーベルを携帯し、「士官クラブ (mess)」を利用することが許されている。ちなみに士官に達していない階級の兵士が許されるのはククリと呼ばれる山刀の携帯のみである。ククリはグルカ兵の象徴とも言うべき武器である。

グルカ兵の士官は以下の三種に分かれる。

①女王グルカ士官 (Queen's Gurkha

Officer, QGO)

通例、勤務年数が18年以上になる准尉もしくは上級下士官の中から選ばれる (House of Commons 1989: xxxvii)。階級は中尉、大尉、少佐などであり、小隊指揮官、大隊副指揮官などの下級指揮官や、グルカ長などの役職を占めている (House of Commons 1989: xxxvii)。1995年以前は、英国人士官よりも格が低い階級として位置づけられていたが、1995年の雇用条件及び待遇の改訂により、少なくとも階級という点では英国人士官と同格となった。しかし、年金に関しては今なおグルカ兵独自の待遇が適用され、英国人士官に比してかなり低額である。

②グルカ士官 (Gurkha Commissioned Officer, GCO)

女王グルカ士官の中から選ばれる (House of Commons 1989: xxxvi)。地位はイギリス人士官と同格であるが、グルカ兵独自の雇用条件及び待遇が適用される (House of Commons 1989: xxxvi)。

③サンドハースト士官 (Sandhurst Commissioned Officer)

陸軍士官学校 (The Royal Military Academy) で教育を受けた士官。地位、雇用条件および待遇ともにイギリス人士官と全く同等である (House of Commons 1989: xxxvi)。

女王グルカ士官とグルカ士官はそれぞれ、肩書きには階級名の後に丸括弧でくくった QGO, GCO を添えて英国人士官と区別する。例えば、女王グルカ士官ディールバハードゥル・ライ大尉は Captain (QGO) Dilbahadur Rai となる。

グルカ兵の士官はいずれも他のグルカ兵同様の経緯で入隊し訓練を受け、兵卒から昇進

、42-44) を参照されたい。

していく。そのため女王グルカ士官の中尉に昇進し士官として遇されるのは、33歳以降に限定される。一方、英国人士官の場合、王立陸軍士官学校卒業後遅からずして少尉として任官するため (Heyman (ed.) 1997: 145), 20歳前後で士官として遇されることが可能である。サンドハースト士官でさえ、英国人とグルカとは昇進の過程、勤務年数などが異なってくる。従って、グルカ兵は英国人とは全く異なる階級体系の中でキャリアを追求していくことになる。

グルカ兵の士官の大多数は、英国人士官よりも待遇面で劣る女王グルカ士官である。1997年現在の時点における士官の割合は全グルカ兵のわずか7パーセント弱である。階級により、給与・年金の額が決まる上に、自発的退職が少ないことを考えるならば、昇進の競争はかなり熾烈であると思われる。

現在グルカでもっとも高位に上り詰め、1995年にグルカ兵初の大隊指揮官となった中佐はサンドハースト士官である。彼は王立陸軍士官学校で優秀な成績を収めて1981年に「名誉の刀剣」を獲得した (Smith 1997: 150)。

現大隊指揮官をのぞけば、グルカ将兵で最も高位の役職は、大隊等に配属されるグルカ長 (Gurkha Major) である。グルカ長は女王グルカ士官の中から選ばれ、その階級は少佐 (女王グルカ士官) である。グルカ長は、大隊指揮官の片腕とも言われる存在で、グルカの文化、宗教、家族に関する事柄について (通常英国人である) 指揮官に対し助言を与える (House of Commons 1989: xxvii)。要するに、英国人士官とグルカ兵の間の文化的仲介者として民族政策の立案に関与し、軍事的要求 (団結と忠誠心) に応えた民族政策を構築することが、グルカ長の役割であるといえる。

軍隊は上意下達階級の社会であるから、グルカ長は他のグルカ将兵に対して強大な権力を行使できると考えられる。ただ、

少佐の任期は3年 (未満) であり、その後の昇進がなければ退職することになっている。大方のグルカ長は任期を終えた後、中佐に昇進することもなく退職していく。

1997年12月当時、旅団には、王立グルカ・ライフル隊第一大隊、同第二大隊、女王グルカ工兵隊、女王グルカ通信隊、女王グルカ輸送連隊の五つの大隊に各1名配属されているほか、グルカ旅団本部に1名、駐ネパール英国グルカ隊に2名の、計8名のグルカ長が配属されていた。

7 宗教政策

グルカ兵には非ヒンドゥー教徒も少なからずいるが、旅団ではヒンドゥー教に限定した一元的宗教政策を実施している。すなわちヒンドゥー教礼拝のための制度・人員・施設が組織的に整備され、グルカ兵の食物禁忌、人生儀礼にともなう休暇、礼拝などが行われる祭日等についての規定もある。旅団が一元的宗教政策をとる根拠は、宗教教師 (次ページ参照) と旅団本部との協議によりまとめられた「グルカ旅団現行指令第3.67号、宗教及び祭礼、休日 (Brigade of Gurkhas Standing Instruction No. 3.67 (BGSI No. 3.67) Religion, Religious Festivals and Holidays)」 (英文、以下、「現行指令」として記述) に見ることができる。「現行指令」は、ヒンドゥー教宗教教師を雇用する根拠として以下の二点を挙げている。

- ①ネパールはヒンドゥー教を公式的宗教とするヒンドゥー王国であるが、法律において信教の自由が保証されている。
- ②ヒンドゥー教徒はグルカの七割を占め、残りの三割は仏教徒であるが、グルカ兵全員がヒンドゥー教にもとづくネパールの文化的慣行に同意をしている。

さらに「現行指令」では、生まれながらに信仰している宗教からグルカ兵を改宗させることは、1947年の三国間協定およびネパールの法律 (Muluki Ain) により禁じられてい

るとしている。たしかに旅団はグルカ兵を改宗させたと思なされないように注意を払っている。例えば、実際にはキリスト教徒のグルカ兵も少数ではあるが存在する。しかし、キリスト教徒グルカ兵が駐屯地においてチャプレン (Chaplain, 軍隊付き牧師) による礼拝に参加するような機会は、全く設けられていない。グルカ兵のキリスト教信仰は、ヒンドゥー教の場合と異なり、旅団にとっては兵士個人の私事であるにすぎない。キリスト教徒またはムスリムのグルカ兵は、駐屯地の外で礼拝の場を見つけることとなる。

8 宗教教師

宗教政策の具体的な策定と運用は、グルカ長と宗教教師の裁量に委ねられている。グルカ長と宗教教師はグルカ兵の宗教生活や軍隊文化を主導していく両輪であるといってもよい。グルカ長の役割や地位についてはすでに述べたので、ここでは宗教教師について見ていきたい。

宗教教師は、「現行指令」の策定に携わるなど、旅団の宗教政策の運用に少なからず影響を与えている。カトマンズから送られてくる暦を参照して旅団の祭日日程を決めるのも宗教教師である¹⁰⁾。宗教教師は毎日朝夕の礼拝を行うほか、日曜日にはグルカ兵の礼拝を司式し、説教を行う。また、ダサインなどの祭礼でも儀礼や祈祷を行う。

現在グルカ旅団では3名の宗教教師が雇われており、グルカ訓練団、王立グルカ・ライフル隊第一大隊、王立グルカ・ライフル隊第二大隊に各1名ずつ配属されている。ただし、グルカ訓練団に配属されている宗教教師は、特殊兵科部隊の三つの大隊も担当してい

る¹¹⁾。また、王立グルカ・ライフル隊第一大隊の宗教教師も、近隣部隊のグルカ兵の礼拝を併せて担当している。おもだった部隊には全て宗教教師が配属されていることになる。大体、グルカ兵千人あたり一人の割合で宗教教師が雇用されているという。

宗教教師として任命されているのは、ネパールの司祭カーストの中でも高位に位置するウパーデヤーヤ (Upadhyaya [upādhyay (a)]) に属するネパール人男性たちである。宗教教師らはネパールのトリブヴァン大学やマヘンドラ・サンスクリット大学でヒンドゥー教学を学んだ後に雇用された。3人とも父が英国陸軍や旧英領インド陸軍のグルカ部隊において宗教教師を務めていた。

彼らは、キリスト教のチャプレンとは異なり、軍属として雇われているため、階級がない。しかし、宗教教師の定年は50歳であり、大方のグルカ将兵に比して任期が長く、影響力を長期間にわたって保持することになる。グルカ兵は宗教教師のことを敬意を込めて「先生 [paṇḍit jī]」と呼び、宗教教師に出会うようなことがあれば、静止していねいに合掌をする。

9 駐屯地の礼拝所

旅団はヒンドゥー教礼拝のための施設として5カ所に礼拝所 (mandir) を設置している。第一大隊が駐屯しているハンプシャー州チャーチ・クルッカムにあるエリザベス女王兵舎 (Queen Elizabeth Barracks) にも、礼拝所が設置されている。エリザベス女王兵舎の礼拝所は木造平屋建ての長方形の兵舎である。礼拝所は他の兵舎と異なり土足厳禁である。内部には赤い絨毯が敷き詰めてあり、前

10) 暦委員会から送られてくる暦上の祭日名は、旅団のそれと若干異なる。

11) グルカ訓練隊の宗教教師が兼任する特殊兵科部隊の三つの大隊は、それぞれが遠方にあるため、順次出張し礼拝を執り行っている。ダサイン祭礼の際には一年交代で三つの大隊を回る。ちなみに1995年の担当は女王グルカ工兵隊、1996年は女王グルカ通信隊、1997年は女王グルカ輸送連隊であった。したがってこれらの特殊兵科部隊のダサイン祭礼では、宗教教師が出席するのは3年に一度となり、そのほかの年はグルカ兵のみでダサイン祭礼を執り行っている。

方中央には祭壇がしつらえてある。壁には神を描いた絵が数枚はってある。屋根のついた小さなポーチの上方には「ドゥルガー女神に勝利を！」とネパール語で大書した布製の横断幕が張り巡らされている。

IV ダサイン祭礼の進行と運営

1 日程と概要

以下は1997年に行われたダサインの行事の日程と概要である。なお、10月4日から7日にかけては行事は予定されていなかった。

- ①10月1日 9:00 ジャマラー・アオン
ス イー (Jamare (*sic*) Aunsi [jamarā
aūsi])

行事名を直訳すると「オオムギの苗の新月」となる。この日、グルカ長と宗教教師が礼拝所内部の暗所におかれた箱にオオムギの種をまく。このオオムギの生長がドゥルガー女神を喜ばせると言われ、苗は後に女神への供え物として用いられる。

- ②10月2日 7:35 ガタスターパナー
(Ghatasthapna (*sic*) [ghaṭasthāpanā])

礼拝所に水を満たした壺を安置する。宗教教師と士官、上級下士官のみが参加する。

- ③10月2日 12:00 合同ダサイン来賓パ
ー テ ィ ー (Combined Dashain
[dasāi/dashāi] External Guest Party)

文民の来賓を招き、准尉及び軍曹クラブにて会食を行う。士官と上級下士官のみが参加する。

- ④10月3日 19:30 歌舞最終リハーサル
(Final Nautch [nāc] Rehearsal)

舞踊団の最終リハーサル。独身者及び単身赴任者が参加する。

- ⑤10月8日 15:15 フールパーティー・
リ ャ ー ウ ネ (Phulpati Layaune (*sic*)
[phūl-pātī lyāune])

行事名を直訳すると「花葉を持ってくる」である。部隊のグルカ兵全員が野辺に出てドゥルガー女神の礼拝と供儀を行い、草花を摘んで持って帰り、女神に供える。

- ⑥10月9日 19:00 カーララートリ (Kala-
ratri [kālrātri])

「カーララートリ」とは、「黒い夜」を意味する。この晩、グルカ兵の舞踊隊による「文化バラエティ・ショー」がダサイン・ホールにおいて開催される。(平常、映画館として使用している建物を「ダサイン・ホール」として転用している。)英国人をも含めた大隊の将兵、将兵の家族、来賓などがショーを見物する。

一方、礼拝所には、宗教教師、グルカ長、その他が集まり、午後11時より儀礼を行い、「山羊」が誅首される(山羊の代用品が用いられる。139ページ参照)。

- ⑦10月10日 9:00 マール (Mar [mār])

行事名を直訳すると「殺害」である。この日、グルカ兵の娘たちが「9人の乙女」として儀礼に参加し、その後金品を褒美としてもらう。彼女たちが退出した後、7頭の「山羊」の供儀が行われる。礼拝所の前の広場に並べられた大隊の武器を花びらでこすり、武器に祝福を与える。供儀を担当した誅首人(mar hanne wala[mār hāne wālā])は褒美として15ポンドを賜る。

- ⑧10月11日 9:05 ティカー (Tika
[ṭikā])

グルカ長がグルカ将兵に祝福を与える。

- ⑨10月11日 16:05 フールパーティー・
セ ラ ウ ネ (Phulpati Selaune [phūlpātī
selāune])

行事名の意味は「花や葉を(聖地や川に)投ずる」である。宗教教師やグルカ

長らが、駐屯地内の野原でドゥルガー女神に対する祈祷と供犠を行い、女神にささげた草花を処分する。

⑩10月18日 19:00 チョータリ・パーティー (Chautari [cautari] Party)

この行事はダサインにおいて様々な役割に携わった人々のための慰労会である。チョータリとは、旅人などが休憩を取る場所のことである。

「現行指令」によれば、ダサインはグルカにとってはクリスマスにも匹敵する主要な祭礼であり、4日間の休日が認められている。ただし休日とはいっても毎日の様に行事や儀礼が行われ、一部の儀礼では出席さえもとられる。以下はダサイン4日間の休日の内訳と1997年の日程である。

フルパーティー・リャウネ (ダサインの第7日)	10月 8日
カーララートリー (ダサインの第8日)	10月 9日
マール (ダサインの第9日) ティカー (ダサインの第10日)	10月10日 10月11日

2 ダサイン祭礼の由来

なぜ、グルカ兵はダサインを祝うのか、またダサインにおいて行われる各儀礼にはどのような意味があるのか。英国人士官その他の来賓が当然抱くであろうこれらの疑問に答えるために、旅団では数種類のパンフレットを発行し、ダサインの由来を説明している。これらのパンフレットは宗教教師の指導の元に、ダサイン委員会の事務官補佐 (132, 133 ページ参照) らによって作成される。筆者の手元には5種類のパンフレットがあり、それぞれ多少異同があるものの、ダサインの由来を次の二つの物語に依拠しつつ述べている。

① 水牛の形をした怪物マヒシャースラ (Mahishasura [mahīśāsura]) は地上の人々に危害を及ぼしていたが、ドゥルガー

女神がこの怪物を打倒した。これは6世紀頃成立したとされるサンスクリット文献『デヴィーマハートミヤ』に描かれる物語である (横地1993: 87)。

② アヨーディヤ国のラーマチャンドラ王子が、ドゥルガー女神の礼拝を行いその力を借りることによって、妻シーターを誘拐したランカの王、ラーヴァナを倒す。これは古代インドの叙事詩のラーマヤナの一部をなす物語である。

以下に代表的説明であると思われる二つのパンフレットの説明を挙げておく。

①旅団が配布するパンフレットに記載されたダサインの由来説明 (要約)

継母の陰謀により故国アヨーディヤ国を追放された第一王子ラーマチャンドラは、妻シーターをランカの王であるラーヴァナに誘拐されてしまう。ラーマチャンドラはラーヴァナを倒すためにドゥルガー女神の礼拝を行った。第1日目の礼拝をガタスターバナーといい、彼は礼拝所を建て女神の神像を安置した。彼は第2日から第7日まで礼拝を続けたので、ドゥルガー女神は彼に超人的な強さと新しい武器を与えて祝福した。第8日目には、女神がラーマチャンドラの元を訪れて、ラーヴァナに戦いを挑むように指示をした。この日をカーララートリーと呼ぶ。第9日に王子はラーヴァナを殺害し、ランカの都を攻め滅ぼした。第10日にはラーマチャンドラの追放が解け、彼は妻や弟を伴い、故国に帰郷した。ラーマチャンドラの母はそれを祝い、額に祝福の印をつけてやった。ラーマチャンドラは王として即位する。

②文化バラエティ・ショーのプログラムに記載されたダサインの由来説明 (要約)

ダサイン祭礼は邪悪なものに対する徳

の勝利を表す。第1日目にはドゥルガー女神への供え物として用いられるオオムギの種がまかれる。ドゥルガー女神は、ブラーマ、ヴィシュヌ、シヴァの三神により、女性の形をとった至高の力としてつくられた。というのも邪悪な巨人であるマヒシャースラが三神をだまして、男性の形をしたいかなる者にもマヒシャースラが負かすことができないようにさせたからである。また、この祭りでは妻を拉致したラーヴァナ王を殺したラーマチャンドラ王子を思い起こして、マウラ（マウロ）と呼ばれる像も建てられる。同王子は、ラーヴァナとの戦いに先立ち、ドゥルガー女神を礼拝するためにこの像を建てた。それが勝利をもたらしたのである。ラーヴァナ王は十の頭を持っていたとされ、デザインとは「十の破壊」を意味する。第7日のフルパーティーの行事ではドゥルガー女神を礼拝するために草花を集めに野に出る。第8日の行事、カーララトリは死の夜である。この日はドゥルガー女神とマヒシャースラとの戦いを記念するものであり、真夜中に行われる山羊の供犠は戦いの始まりを意味する。この夜、大パーティーとネパール文化ショー（文化バラエティ・ショー）が開催される。第9日の行事名であるマールとは「切ること」を意味し、マヒシャースラの死を祝うものである。第10日のティカーは地上に平和に戻った日である。この日、家庭では家長が子供たちに祝福を与え、その幸せと繁栄とを祈ってやる。

説明の内容はパンフレットにより多少異なるが、どのパンフレットも一貫して強調するテーマは、悪に対する善の勝利であり、ドゥルガー女神は善の象徴もしくは悪と戦う者を支援する存在として描かれる。そして旅団のデザイン祭礼は、これらの神話・伝説との整

合性を保ち、物語を再生するかのように進行する。これらのパンフレットは、グルカ兵がヒンドゥー教徒であり、宗教的正統性をもった祭礼を行っていることを、公式的に表明するものであるといえる。

3 旅団がデザインを行う目的

各種パンフレットがインド古典文学に依拠して祭礼の由来を説明する一方で、1998年6月現在のグルカ長及び宗教教師は、別の立場からデザインを行う理由を説明する。（1997年のデザインを執行したグルカ長は停年退職し、1998年3月に、デザイン委員会の副委員長であった人物がかねて予定されていた通りグルカ長に昇進した。）まず、グルカ長は、「(旅団がデザインを行う目的は)我々ネパール人の文化を維持すること、まさにそれだ」ときっぱりと言う。それに宗教教師が「文化と習慣、それに宗教だ」と付け加える。

4 名称の変更

現在、グルカ旅団のドゥルガー女神の大祭は「デザイン」というネパール風の名称で呼ばれている。しかし、以前は、「ダシェラー(Dashera)」というインド風の名称で呼ばれていた。これは、グルカ部隊が旧英領インド陸軍の一部であった頃以来の伝統である。が、この名称がインドに由来する用語であると言うことが判明し、1995年に、各大隊のグルカ長らが集まる会議において、グルカ長全員の名において、「適切な名称に変えるべきだ」とする発議がなされ可決された。その結果、1995年の祭礼から「デザイン」という名称を使用することとなった。この決定については、「我々はインドの名称など使いたくないということで変えた」などと述べるグルカ兵もあり、士官のみならずグルカ兵全般からおおむね支持されているとあってよい。かくしてインド独立後48年にしてようやく、この祭礼の名称がネパール化されることとなった。この決定は、旧英領インド陸軍の一部で

あったグルカ部隊の過去との決別を表明するものであったともいえよう。

5 ダサインの財政

ダサインの開催には、多額の財源が必要となる。1996年10月、香港駐留時に行われたダサインにおいては、107,500香港ドルが消費された。これは1ポンド=12香港ドルのレートで換算して約9千ポンドの支出となる。(1997年10月頃の為替レートで換算して、日本円では2百万円程度費やしたことになる。) そのうち、食物・飲料のみの支出だけでも30,603.50香港ドルに上った。面接調査当時、1997年のダサインでもそれと同程度の支出が予定されていた。

これらの支出の財源となるのは、連隊長機関 (President Regimental Institute, PRI) と呼ばれる組織に保管されている基金である。この組織は、各隊に設置されている。グルカ部隊ではすべてのグルカ将兵が毎月1ポンドをPRIに拠出し、この拠出金によりダサインが運営される仕組みとなっているのである。第一大隊では大隊副指揮官が会計を担当している。

過去には、英国人士官がダサインの運営のために寄付をすることもあったという報告がある (例えば Farwell 1984: 140)。しかし、現在ではグルカ将兵の拠出金のみによってまかなわれている。

つまり、グルカ兵全員が祭礼のパトロンであり、しかも階級に関係なく平等な拠出をするということになる。この点、19世紀メーワールの王によって行われてきたナヴァラトリ (Fuller 1992: 118) のような伝統的王権の祭礼とは大きく異なるといえよう。

6 役割分担

第一大隊では、毎年ダサイン祭礼における作業の遂行のために「ダサイン組織委員会 (Dashain Organisation Committee)」と「チャウタリ委員会 (Chautari Committee)」を

編成する。「ダサイン組織委員会」は通例「ダサイン委員会 (Dashain Committee)」と略して呼ばれており、以下本論中でもこの通称を用いる。表1は1997年のダサイン委員会の編成とメンバーである。

ダサイン委員会の委員長を務めるのは通例グルカ長である。彼は各担当士官を指名し、ダサイン委員会を編成し、ダサイン祭礼が成功裏に終わるように総指揮を執る。しかし、ダサインの期間中は儀礼の執行など表に出る役割が多いため、実際に儀礼や式典を運営していくのは各担当士官や連隊長 (Regimental Sergeant Major)、中隊長特務曹長 (Company Sergeant Major) などである。期間中、グルカ長は毎日の沐浴と礼拝を欠かさず行う。

グルカ長の在任期間は2年、と短い、その勤務年数は女王グルカ士官の中でも最長である。グルカ長は、この長年の軍隊生活を通して、ダサインを何回も異なる立場から経験している。また、彼のもとには過去のダサインの際に作成された議事録や予算案などの書類が保存されており、翌年のダサインにおいて参考資料として活用される。

次に、宗教教師は二つの役割を果たす。第一に、儀礼の企画、準備、執行により軍隊の祭礼に宗教的正統性を付与する。第二に、説教やパンフレットの作成などを通して祭礼の基調をなす理念を提供する。

ダサイン委員会の各担当士官として任命されるのは、中隊副指揮官レベルの士官、すなわち女王グルカ士官の大尉に相当する階級の士官が多い。しかし、中には鼓笛担当士官のように軍曹クラスの者もあり、「担当士官」の全員が、文字通りの士官と言うわけではない (写真1は鼓笛隊を率いる鼓笛担当士官)。

表1からも明らかであるように担当士官を任命するにあたってまず考慮するのは、階級と役職である。第二には、平常業務との関連、技能などである。例としては輸送担当士官、保安及び防火士官、ビデオ及び写真担当士官

表1 1997年のデザインのために設置されたデザイン組織委員会（通称「デザイン委員会」）

通し番号	役職名	備考（担当者，役割の内容など）
1	デザイン担当士官（組織委員会委員長） （OIC Dashain [dasai]）	担当者はグルカ長（女王グルカ士官，少佐）。
2	デザイン担当副士官 （組織委員会副委員長） （Asst OIC Dashain [dasai]）	担当者は次期グルカ長（女王グルカ士官，大尉）。 役割はテイカー儀礼の差配など。
3	事務官（Secretary）	
4	事務官補佐（Asst Secretary）	担当者はデザイン終了後，中隊事務室勤務が 予定されていた軍曹。
5	司祭（Pandit (priest) [paṇḍit]）	担当者は第一大隊の宗教教師。
6	マール担当士官（OIC Mar [mār]）	役割は供犠の準備，及びマールの日の儀礼の 差配。
7	マール担当士官補佐（Asst Mar [mār]）	
8	プジャーリー担当士官 （OIC Pujari [pujari]）	役割は宗教教師を補佐して儀礼を執行するこ と。 「グルカのその他の階級」の兵士6名からな るプジャーリーを指揮して任務にあたる。 （プジャーリーとは 儀礼の執行に携わる者。） 担当者はネパールにおいてもプジャーリーを 勤めていた家柄の出身者が好ましい。「グル カのその他の階級」のプジャーリーのうち1 名は供犠獣の馘首を担当する馘首人（マール ・ハンネ・ワラ）となる。
9	讃歌担当士官 （OIC Malshiri [māl(a)sirī]）	役割は，儀礼においてドゥルガー女神の讃歌 を詠唱する讃歌隊の構成と指揮。 讃歌隊は「グルカのその他の階級」の兵士5 名を加えて構成する。 祖国ネパールにおいても讃歌を歌った経験の ある者を担当者に選ぶようにする。
10	礼砲隊担当士官（OIC Firing Party）	役割は礼砲隊の構成と指揮。 礼砲隊は「グルカのその他の階級」の兵士8 名を加えて構成。
11	鼓笛担当士官（OIC Ps & Ds）	役割は鼓笛隊の指揮。担当者は本部付き中隊 に所属する鼓手長（軍曹）。
12	鼓笛補佐（Asst Ps & Ds）	
13	管理担当士官（Admin Officer）	役割はグルカ兵の家族の世話。
14	管理担当士官補佐（Asst Admin Officer）	
15	会食担当士官（OIC Messing）	役割はメニューの決定など会食の準備。
16	会食補佐（Asst Messing）	担当者は上級下士官4名。
17	ワイン担当士官（OIC Wine）	役割は酒類の準備。
18	ワイン補佐（Asst Wine）	担当者は上級下士官4名。
19	座席担当士官（OIC Seating）	役割は座席の決定と名札の作成。
20	座席補佐（Asst Seating）	

21	舞踊担当士官 (OIC Nautch[nāc])	役割は文化バラエティ・ショーの舞踊の企画。
22	舞踊補佐 (Asst Nautch[nāc])	舞踊隊を加える。舞踊隊には経験者を含めることが望ましい。娘役には眉目秀麗の若年兵士を使う。
23	拡声機及び照明担当士官 (OIC PA/Lighting)	担当者は日頃より関連職務を担当している者。
24	拡声機及び照明補佐 (Asst PA/Lighting)	
25	輸送担当士官 (OIC Transport)	担当者は平常より輸送を担当する部局の者。役割は大型バスを用いた家族らの輸送。
26	輸送補佐 (Asst Transport)	
27	舞台担当士官 (OIC Stage)	役割はデザイン・ホール・ステージの設営。担当者は、過去のデザインにおいてこの職務の経験がある者。
28	舞台補佐 (Asst Stage)	
29	装飾担当士官 (OIC Decoration)	担当者は、過去のデザインにおいてこの職務の経験がある者。
30	装飾補佐 (Asst Decoration)	
31	入場門担当士官 (OIC Gates)	役割はデザイン・ホール正面の入場門の設営。
32	入場門補佐 (Asst Gates)	
33	礼拝所及び家族担当士官 (OIC Mandir[mandir]/Families)	役割は礼拝所及びグルカの家族に関する事柄の調整。担当者は、過去のデザインにおいてこの職務の経験がある者。
34	礼拝所補佐 (Asst Mandir[mandir])	
35	ビデオ及び写真担当士官 (OIC Video/Photography)	役割はビデオ録画や写真撮影による祭礼の記録。担当者は本部付き中隊に所属する諜報部士官。
36	ビデオ及び写真補佐 (Asst Video/Photography)	担当者は「グルカのその他の階級」の兵士2名。
37	合同来賓パーティー担当士官 (OIC Combined External Guest Party)	役割は合同デザイン来賓パーティーの差配。
38	補佐 (Asst)	役割は37の補佐。担当者は士官2名及び上級下士官1名。
39	保安及び防火士官 (Security and Fire Officer)	役割は防火と会場の清掃。担当者は平常業務において防火・保安等についての訓練を受けている者。
40	保安及び防火士官補佐 (Asst Security and Fire Officer)	
41	診療所担当士官 (OIC Medical)	担当者の平常業務は、駐屯地の診療所における医師の補佐。

表1の凡例

役職名中の略語は以下のことを意味する。

OIC=Officer in charge (担当士官)

Admin=Administration (管理)

Asst=Assistant (補佐)

PA=Public address (拡声器を用いた館内呼び出しや放送)

Ps & Ds=Pipes and drums (鼓笛隊)



写真1 鼓笛隊

等が挙げられる。第三に考慮するのは、過去のダサインでどのような職務を経験したか、ということである。例えば、舞踊団などの場合、過去のダサインにおける経験者を任命するようにする。第四にはカースト・民族的背景である。特に、プジャーリー (pujari [pujāri], 礼拝・供養の執行に携わる者) や讃歌隊等の場合には、その役割に適した家柄の出身者や経験者が望ましいとされる。プジャーリーの場合、酒類をたしなまない者など、カーストを限定するような条件が付くこともある。そのため、「奴隷にすることのできない飲酒者」(Höfer 1979: 45) とされるグルンやマガルなどはその条件からはずれることになる。もっとも適格者がいない場合には、ほかの者でもかまわないが、その場合少なくとも祭礼の期間中は酒類や動物性の食品の摂食を控えなければならない。

担当士官は、さらに、自分の部下などを補佐に任命するなどして動員する。補佐として任命されるのは上級下士官が多い。また下働

きなどは兵卒に割り当てられる。グルカ将兵は、階級を上げていく過程で様々な立場でダサインにおける役割を経験することになる。ただし、役割の内容は平常業務との関連や技能、経験、カースト・民族的出自などにより規定されるため、個々のグルカ兵が経験する役割は特定のものに限定されがちである。

ダサインが終了すると、ダサインの運営に携わった人々のための慰労会、「チョータリ・パーティー」が開かれる。このパーティーの開催のために組織されるのが、「チョータリ委員会」である。チョータリ委員会は各中隊の中隊副指揮官(女王グルカ士官の大尉にほぼ相当する役職)と連隊特務曹長(一級准尉にほぼ相当)、隊務担当士官 (Unit Family's Officer) から構成される¹²⁾。

7 作業の段取り

ダサインが滞りなく進行するように、関係者には英語で書かれた詳細な手引き書が配られる。この手引き書においては、日程、集合

12) 「隊務担当士官」とは、筆者による Unit Family's Officer の試訳である。

表2 フールパーティー・リャーウネ儀礼の手引き

通し 番号	日 付	時間及び行事	備 考
5	97年10月 8日(水)	<p>フールパーティー・リャーウネ</p> <p>1. 14:45</p> <p>a. クビンドを1本用意。</p> <p>b. 礼砲隊、讃歌隊準備完了。 定位置に。</p> <p>2. 15:00 礼拝所に全員集合。 服装: 連隊の平服にセーター、 ネパール帽。</p> <p>3. 15:15 フールパーティー・リ ャーウネ儀礼のために礼拝所 を発つ。</p> <p>4. フールパーティーを持って 礼拝所に帰還。</p>	<p>a. マール担当士官が担当。</p> <p>b. 礼砲隊担当士官は空砲を撃つ用意をさ せる。</p> <p>c. プジャーリー担当士官／鼓笛担当士官 フル・バンドが必要。 服装: 連隊の昼間用平服。</p> <p>d. 副中隊長, 連隊特務曹長, 中隊特務曹 長は出席をとる。</p> <p>e. 各中隊はメダル類を持ってくる。</p> <p>f. 礼拝所及び家族担当士官は茶や飲み物 を現金取引で手配。</p>

出典：作業担当者に配られた手引きを筆者が和訳した。

表3 作業担当者に配られたティカー儀礼の手引き

通し 番号	日 付	時間及び行事	備 考
8	97年10月 11日(土)	<p>ティカー</p> <p>1. 08:05 オオムギの苗を刈り取る。</p> <p>2. 08:45 全員が礼拝所に集合。</p> <p>3. 以下の順で祝福の印を受け る。(東方を向くこと。)</p> <p>a. マウロ, 宗教教師, プジャー リー</p> <p>b. 女王グルカ士官, 来賓</p> <p>c. 上級下士官</p> <p>d. グルカのその他の階級</p>	<p>a. グルカ長, 宗教教師, プジャーリーが 参加。</p> <p>b. 全員参加。</p> <p>c. ダサイン担当副士官は以下のものを用 意。</p> <p>(1) 2本の白いターバン。(プジャーリ ー担当士官と誠首人のため)</p> <p>(2) 10ポンドずつ入った封筒を6枚, プ ジャーリー6名のため。</p> <p>(3) 供物と2種類の軽食。</p>

出典：作業担当者に配られた手引きを筆者が和訳した。

時刻、場所、行事名、責任者、役回り、参加者、服装、用意すべき金品、さらには祝福を受ける順番までもが詳細に指示される(表2, 3)。作業の担当者は、さらに、自分の作業に関する特記事項を手引き書に書き加え、当日持ち歩く。このような計画的運営により第一大隊のデザインは粛々と実行されるのである。

V 集団的アイデンティティの方向づけ

1 フールパーティー・リャウネ儀礼に見る「伝統文化」の強調

デザイン祭礼においては何度となく、ネパール国民としての意識を鼓舞し「伝統文化」を重視するよう呼びかけがなされる。フールパーティー・リャウネ儀礼の進行を例に取り見てみよう。

フールパーティー・リャウネ儀礼はデザインの休日の第一日目に行われる。集合場所は礼拝所の脇の広場である。広場の中央にはドゥルガー女神の武器が色鮮やかに描かれた柱像が立っている。この柱像のことをマウロと呼ぶ。

フールパーティー・リャウネ儀礼においては参加者の出席をとる。この日は休日であるのだが、祭礼への参加はほとんど義務的であるといつてよい。

また、この行事においては服装が指定されている。指定の服装とは、連隊の平服(白のカッターシャツと灰色のズボン)にセーターと丸いネパール帽(*topi* [ʈopi])という出で立ちである。新兵だけは平服の上にカーキ色のアノラックを着用し同色のニットのキャップをかぶっている。鼓笛隊は平服とセーターの上に連隊色である濃緑色のケープをまとい、ネパール帽をかぶっている。礼砲隊は迷彩色の野戦服を着用し、濃緑色のベレーをかぶっている(写真2)。グルカ長も平服にネパール帽であるが、右腕に赤いリボンを巻き、素足にサンダルを履いている。赤いリボンは

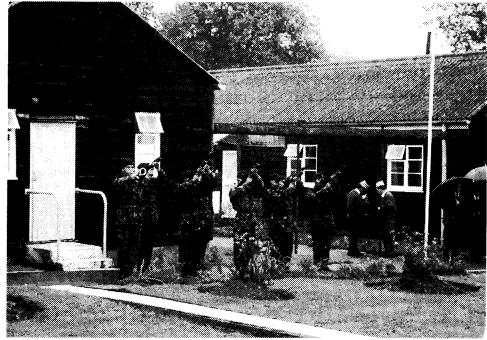


写真2 礼砲隊

宗教教師がつくったもので、儀礼を成功させるためにつけるといふ。プジャーリーたちは白いカッターシャツと白い腰巻き [*dhoti*]、灰色のセーターを着用し、やはり右手に赤いリボンを巻き、素足にサンダルを履いている。宗教教師はカミージ [*kamij*] という白くて長めの上着に白い腰巻きを巻き、カーディガンを羽織り、素足にサンダルを履く。しかし、礼拝所内部や祈禱の場所に立ち入る時にはグルカ長、宗教教師、プジャーリーらはサンダルをぬぎ、裸足となる。

定刻に集まったグルカ将兵らは、中隊ごとに固まって集まり、民謡を歌っている。それぞれの集まりの真ん中で舞踊団のメンバー2, 3人が歌声に合わせて太鼓をたたいたり、踊ったりしている。

開始時刻になると、宗教教師が鉦を鳴らし、礼砲隊が空砲を撃ちラッパを吹く(写真2)。さらに鼓笛隊によるバグパイプと太鼓によるスコットランド風楽曲の演奏も始まる。儀礼を執り行う人々の行列が礼拝所のまわりをぐるぐるとまわり始める。この行列の構成は以下の通りである(写真3)。

- ①水の入った銅の壺を持ったプジャーリー担当士官(1名)
- ②輿([*doli*], 赤と黄の布を張った2本の棒)をかつぐプジャーリー(2名)
- ③供犠用の大きな山刀を持った馘首人(1



写真3 礼拝所のまわりを巡回する行列

- 名)
- ④「山羊」をかたどったクビンド (kubhindo [kubhindo], カボチャの一種) を持つ
プジャーリー (1名) (写真4参照)
 - ⑤グルカ長 (1名)
 - ⑥宗教教師 (1名)
 - ⑦赤いハンカチを持つプジャーリー (2名)
 - ⑧小さな木の箱を持ったプジャーリー (1名)
 - ⑨讃歌隊 (malshiri toli [mālsirī toli]) (6名)

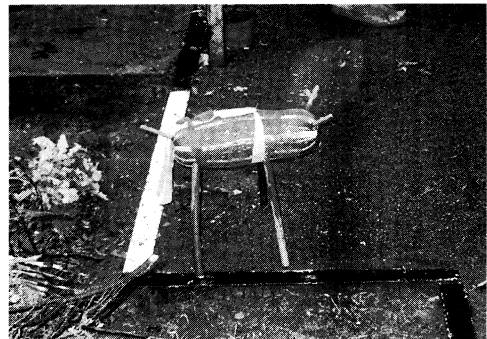


写真4 クビンド

巡回の途中、宗教教師とグルカ将兵は以下のような掛け合いをする。

宗教教師 「ドゥルガー女神の」

グルカ将兵 「勝利！」

宗教教師 「ガネーシャ神の」

グルカ将兵 「勝利！」

宗教教師 「ラーマチャンドラ王子の」

グルカ将兵 「勝利！」

宗教教師 「我々の伝統宗教の」

グルカ将兵 「勝利！」

礼拝所のまわりを三回まわった後、全隊は

儀礼を行う場所へと向かう。一行を先導するのは、スコットランド風楽曲を演奏し続ける鼓笛隊と礼砲隊である。兵士たちの故郷では、ベルノキ (柑橘系の樹木) のある場所がこの儀礼を行う場所としてふさわしいとされている。しかし、チャーチ・クルッカムの駐屯地では望めないため、適当な樹木のあるところならどこでもよいとされている。

駐屯地内の林に到着すると、当日の激しい風雨を避けるために、迷彩色のシートを用いて急ごしらえのテントが設営され、その下に祈禱のための場所がしつらえられた。地面に

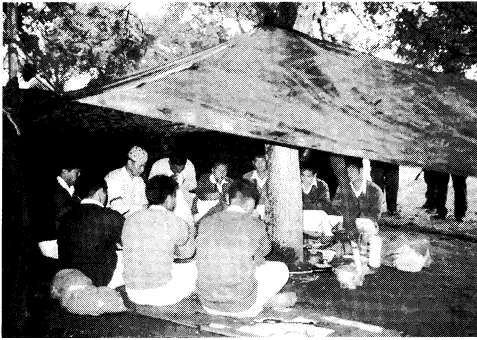


写真5 フールパーティー・リャウネ儀礼

はシートを敷き、覆いのついた入れ物に聖なる火を焚き、花や、顔料、香、パンチャ・アムリットと呼ばれる液体（乳、ヨーグルト、糖蜜、砂糖、バターの混合液）などの入った銅の容器や祭具等が並べられる。このシートを囲むようにして四方に細長い長方形の板を渡し、グルカ長、宗教教師、ブジャーリーらがあるの上に座り、祈祷を行う（写真5）。讃歌隊は少し離れたところで讃歌を詠唱する。また、グルカ兵らは、中隊ごとに集まり、民謡を歌い踊る。

祈祷が終わると、馘首人が出てきて、大きな山刀を用いて一刀のもとに、山羊をかたどったクビンドの「首」を切る。クビンドというのはプラダーンら（Pradhān & Pradhān 1983 [1971]）によるとカボチャの一種であり、学名は *Bernicasa Hispida* である。英国の駐屯地においては、本物の山羊の代わりにクビンドを供犠に用いている。このことについては後ほど詳しく述べることにしたい。

「山羊」の頭が切り落とされた瞬間、礼砲隊が空砲を撃ちラッパを吹き鳴らして、馘首の成功を高らかに宣言する。再度、宗教教師とグルカ将兵により前回と同様の掛け合いがおこなわれる。

グルカ長が祈祷場所選ばれた大木から枝を刈り取る。この枝は、赤や黄、白のリボンで束ねられ、輿 [dolī] の布の中に包み、二人のブジャーリーが肩に担ぐ。

一行は再びマウロのある広場に戻る。グルカ将兵らも手に草花を持ち、来たときと同様に行列をくんで戻る。グルカ長が刈り取ってきた枝はドゥルガー女神の祭壇に供えられる。

広場では宗教教師による説教が始まる。説教は、ネパールの伝統文化を維持することの大切さやデザイン祭礼を行うことの意義とその由来を説くものであり、詳細な内容については後に紹介する。最後に皆を祝福する言葉を述べ、宗教教師の演説は終了した。

説教が終わると、宗教教師は、グルカ将兵らの額に祝福の印をつけてやる。同時に一人のブジャーリーが宗教教師と並び立ち、黄色い花とリンゴを渡していく。このリンゴはドゥルガー女神の祭壇に供えられていた供物を下げ渡すものである。以上でフールパーティー・リャウネの儀礼は終了する。

このように、フールパーティー・リャウネ儀礼においては、ネパール風の服装が指定されたり、ネパールの「伝統文化」についての認識を深めるよう促す呼びかけがなされたりするのである。

2 供犠に見る「ネパール文化」の再生産

デザイン祭礼における供犠の成功如何はその年の部隊の運を占う前兆であるとされ、重要な関心事となっている。一刀のもとに供犠獣の首を切り落とすことができれば、その年は幸運の年となるという。一方、失敗した場合には疫病の流行などの悪運に見舞われるという。

しかしながら、動物愛護運動が盛んな英国では、動物の供犠を行うと、「動物に対する残虐行為を防止するための王立協会」(Royal Society for Prevention of Cruelty to Animals, RSPCA) から抗議が来るという。そのため、英国に駐屯する部隊では、動物の供犠は行わずに、クビンドを用意し、「山羊」の姿をかたどって供犠に用いている。香港に駐屯していた頃には、本物の山羊とクビンドの双方を供

儀に用いていたという。

クビンドの頭部には2本の細い枝を刺して角とし、四肢には長めの細い枝を刺す。さらに尾の部分にも細い枝を刺す。こうしてできた「山羊」を血にまみれた姿とするために全体に赤の顔料を塗りたくる。また、赤と黄のリボンを胴体に巻き、綱につながれて曳いてこられた山羊、といった風体にする。

「馘首」のあとは花びらでククリをこすり、「山羊」の血を拭う仕草をする。マールの日にも山羊の血を武器に塗る代わりに、花びらでこすることにより武器に祝福を与えるという。

このような代用品の使用は、グルカ兵の「発明」ではない。アンダーソンによると、ネパール本国においても、ヴィシュヌ神を信奉する肉食主義者の中に、動物の代わりにクビンドを用いて供儀を行うものがあるという (Anderson 1988 [1971]: 149)。これはインド、スリランカ等南アジア各地で見受けられる慣行であり、たとえばマイソールのダシャラーでは動物の代用としてカボチャが供儀に用いられていたという (Fuller 1992: 117)。第一大隊の宗教教師も、ヴィシュヌ派の肉食主義者と全く同じ流儀でクビンドを用いていることを認めている。要するに、故郷に存するような供儀のレポートリーを採用して、英国の動物愛護運動の意向に配慮した修正を行っているのである。

1973年に本部が香港に移転するまでは、グルカ部隊でも水牛が供儀に用いられていたという。現在ではネパールに駐在する部隊のみが水牛の供儀を行っており、それをもって「旅団全体のための水牛の供儀」(第一大隊のパンフレット)としている。つまり、英国陸軍グルカ兵のダサインは、グルカ兵の祖国ネパールにおいて行われるダサインを加えることにより完結するともいえる。

3 宗教教師の説教に見るグルカ兵のアイデンティティ

フルパーティー・リャーウネの儀礼の終盤になされた宗教教師の演説は、グルカ兵の軍隊文化の指導者の一人である宗教教師が、どのようにグルカ兵のアイデンティティを方向付けようとしているのかを知る上で、貴重な資料である。そこでその演説を紹介するとともに簡単な分析を加えたい。

フルパーティー・リャーウネの日に行われた宗教教師の演説

我々ネパール人は異国にあってもネパールの名誉を守り、自分自身に誇りを持っている。美しきものにあふれるネパールの地に生育した我らは、世界のどんな片隅にあらうとも、我々の文化を忘れない。世の聡明なる人々は皆、自分たちの芸術や文化を大いなる財産であるとして大事にする。ネパール人たちは、世界のありとあらゆる場所において、たいそう昔からゴルカ人として知られてきた¹³⁾。彼らゴルカ人たちは、平時であれ戦時であれ、礼拝所のないところに行けば礼拝所とご神像をつくり、自分たちの伝統と文化、慣習、自分たちの社会の価値、人々の守る規範などに重きを置いてきたのである。これらのことがらは我々の「富」とも言えるものである。このような「富」の中には、我国の多様な家族生活にも統一性があるのだということ鮮やかに示す祭礼がある。それはダサインである。我々ネパール人は、多様ではあるが、祭礼や伝統、生活様式など、すべての事柄において一つである。この統一性を何にもまして大々的に示すのである、ダサインは。

13) ゴルカとは、グルカの別の呼称である。ちなみにインド陸軍ではネパール人兵士からなる連隊の名称に「グルカ」ではなく「ゴルカ (Gorkha)」を冠している。

今日、我々はダサインの第7日に入った。最初の日にはガタスターパナーを行い、それから順を追ってドゥルガーの九つの礼拝を行っていく。このようにしてドゥルガーの九つの礼拝を行うという習わしが、いかなる理由で、またいつから始まったのかを、確定して述べることはできない。

我々は、ラーマチャンドラ神がご自分の中に力を蓄えて英知を得ることができた、ということをお示しになった時のことを思い起こす。なぜかと言えば、あのお方は、お父上の命令に従われ、それから継母の命令にも従われ、一人の人間が自分よりも目上の人物の命令を守るためにどんな義務を果たさなければならないのかということ、そうしてお示しになったのである。その義務を果たすためにあのお方はドゥルガー女神の祝福を得られたのである。ドゥルガー女神の礼拝を行うことなしには、あのお方はご自身の愛妻であるシーターを取り戻すことはおできにならなかった。このようにしてラーマチャンドラ神は神の力を手に入れ羅刹女の力を負かし、ガタスターパナーを行われたのである。

それをなぜなさったのかというと、「ガタ」というのは「素焼きの壺」である。それを常に満たしておいたのである。その意図するところは何かと言うと、人間と言うものはいつも空虚でいるということではできない。すなわち、人は完全なるものを目指さなければならないのだ。それ故に、ラーマチャンドラ神もご自分の得られた力を完全なものとするために、「ガタスターパナー」を行われたのである。「ガタ」（素焼きの壺）には水が入っているが、これは冷静さの象徴である。どんな仕事をする時でも、冷静に行わなかったならば、その仕事を成功裏に終了させることはできない。

このようにして、神は力を手に入れるために、かつ、敵を攻撃して勝利を掌中に収めるためにガタスターパナーを行い、ドゥルガーの礼拝を行い遊ばしたのである。こうするためにナーラダ様（天からの伝言を伝えるために使わされた使者）は神に助言をお与えになった。ナーラダ様はおっしゃった。「敵がシーター様を誘拐したために、あなた様は苦悩にさいなまれ続けてこられました。その敵は著しく強うございます。あなた様はそやつを普通のやり方で負かすことはおできになりません。敵をいつも通常のやり方でとってはなりません。ですから、あなたはドゥルガーの礼拝を行い、知的勇気を手にお入れなさい。ありとあらゆるものにもまして大きな力というのは、知的勇気のことなのです」。

こうしてラーマチャンドラ神はその力を手に入れるためにドゥルガーの礼拝をし続けられたのである。こうして第7日目には、ラーマチャンドラ神は9種の様々な草花をドゥルガー女神に供えられた。ドゥルガー女神はお喜びになり、ラーマチャンドラ神に武器についてよくお教えになった。敵との戦いに必要な武器をどのように用い、そして敵をどのように破壊するのか、この二つのことをあのお方に詳しく説明された。羅刹というのは、邪悪なものであり、愚鈍でもある。であるから、それを四足獣にたとえることができる。このようにして8日間というもの、毎日、ドゥルガー女神はラーマチャンドラ神に武器についてお教えになり、また、どのようにして羅刹を殺すのか、ということについてお教えになったので、その日にはお供えが捧げられるのである。

第9日にも九つのドゥルガーの礼拝を行い、お供えを奉納する。お供えは、雄の水牛か雄の山羊、または雄の羊を献上

する。雄の水牛というのは怒りの象徴であり、雄の山羊というのは好色の象徴、雄の羊というのは煩惱に陥ることの象徴である。どんな人の内面にも怒りや性欲、煩惱があるから、それらを追い払うために知的勇気を手に入れねばならないのだ。それらの四足獣のお供えを奉納するということは、それらの悪い事柄を自ら追い払うという意図があるのである。

第10日目にはオオムギの芽を奉納する。その後、自分よりも目上の人の手から祝福の印をつけてもらいオオムギの苗を受け取り、祝福をしてもらう。祝福を与える時、その方々は次のようなことをおっしゃる。

齢はドローナの息子のごとく長寿であれ。

ダシャーラトのように裕福であれ。

ラーマチャンドラのように敵を殺すことができる人物であれ。

ヴィドゥラのように英明であれ。

こうして、ガタスターパナーを行い、九つのドゥルガーの礼拝を行い、第10日目には祝福の印をつけるというならわしは、ラーマチャンドラ神の時代から行われていたのである。

ユディシュティラの時にも、あの方々は一年間隠れ家にいらしたが、ドゥルガー女神の礼拝を行い、身を隠す力を身につけられた。あの方々は英雄であらせられたので、何もせずに隠れていることは困難であったが、隠れる力、すなわち忍耐力を手にいれるためにドゥルガー女神の祈禱を行わなければならなかったのである。

(最後に皆を祝福する言葉を述べ、宗教教師の演説は終了した。)

ここで宗教教師の演説を、グルカ兵のアイ

デンティティをどのような方向に強化する内容であるのか、という観点から分析したい。

まず彼は、グルカ兵(演説中の「ゴルカ人」)をネパール人だとして定義する。その上で彼は伝統文化を保持することの大切さを訴える。ここで彼の言うところの伝統文化とは、グルカ兵を構成するグルンやマガールなどの個々の民族のそれではなく、ネパールのそれである。かれは多様なネパールの文化にも統一性があるのだと主張し、ダサインの存在こそがネパールの国民文化の統一性をよく示すのだとする。つまり、ネパールの統一のとれた伝統文化を守るためにダサインをしなければならぬというのが彼の主張である。

次に宗教教師はダサインの由来などについて述べる。ここで焦点が当てられるのは、祖国を追われ放浪する王子が誘拐された妻を取り戻すという、インド古代叙事詩『ラーマヤナ』中の物語である。彼はこの古代叙事詩から、兵士の体験に見合うような教訓を引き出している。「教訓」とは、知性に裏付けられた勇敢さである。怒り、好色、煩惱を払いのけ、冷静な判断力を持つことにより勝利を手にすることができるというものである。戦いの相手は「悪」のみならず自分自身の内面の煩惱でもある。宗教教師が強調するこのような理想的人格のモデルは、英国人士官らにより作り上げられたグルカ兵の表象には見られない要素である。

以上の処世訓を引き出すことができるのも、有名な叙事詩中の人物とグルカ兵との間にいくつかの共通点があるからであるといえよう。第一の共通点は、祖国を離れ放浪するという王子の運命と、外国の軍隊において勤務する兵士のそれである。第二には、両者が「悪」とされるものと戦う存在であるという点である。第三には、両者ともドゥルガー女神との特別な庇護関係に入り、その祝福を受けようとする点である。

説教の末尾ではさらに、最終日に目上の人物から与えられる祝福について説明がなさ

れ、別の古代叙事詩『マハーバーラタ』中の人物も言及される。ドローナの息子はインド古代叙事詩『マハーバーラタ』の登場人物であり、不死であったとされる。ヴィドゥラも『マハーバーラタ』中に登場する賢者である。さらにユディシュティラは『マハーバーラタ』の主人公である。ダシャーラトだけは『ラーマヤナ』の登場人物で、前出のラーマチャンドラ王子の父である。またデザインがはるかなる過去から行われていたと主張され、グルカ兵のデザインが悠久の歴史に連なるものとして位置づけられる。最後に『マハーバーラタ』中のユディシュティラもやはりドゥルガー女神の庇護下にあったと付け加えられ、ドゥルガー女神礼拝の普遍性が強調されるのである。

宗教教師の説教は南アジア文明圏においてはありふれた語りではある。しかし祖国を離れ外国の軍隊で働くグルカ兵の職業体験を、南アジア文化圏の伝統に沿った形で方向付け道徳的指針を与える内容となっている。さらに、前半部で鼓舞された国民という共時的一体性は、インド古代叙事詩中の人物を引くことにより、時間的な広がりをも兼ね備えた超歴史的「伝統」の中で位置づけられている。

4 文化バラエティ・ショーに見る「ネパール文化」

「ネパール文化」なるものの内実をさらに明らかにするために、カーララトリの夜に開催される「文化バラエティ・ショー」のプログラムを見てみよう（表4）¹⁴⁾。このショ

ーは、アンナプルナ山に臨む西ネパールの農村風景が背景に描かれた舞台の上で繰り広げられる。この種のショーは、ネパールのホテルその他でも観光客向けに開催されている。

ショーでは冒頭、ネパールの国歌が演奏される。英国に駐屯するグルカ兵たちは日頃、ヒンディー語のラジオ放送を聞き、インドの流行歌などにも詳しいのであるが、当日演じられるのは、すべてネパールの歌謡や舞踊である。

宗教教師とグルカ長（1998年6月当時）は文化バラエティ・ショーの演目について、様々な民族の歌舞を演じていると解説する。たとえば、宗教教師は、「ネパールにはとても多くの慣習と文化がある。だからすべての民族の歌と踊りを上演する」のだと説明する。グルカ長も「その通り。我々はネパールの様々な土地から来ており、めいめい別々の文化を持っているのだ」と述べる。さらに宗教教師は、「我々が一つの文化、というものはある特定のカーストの文化だけではなく、我々ネパール人の文化なのだ。多様な文化なのだ」と注釈をつける。グルカ兵の軍隊文化を方向付ける両者は、部隊のデザインが特定の民族・カーストの文化を持ってきたものではなく、故国ネパールの民族的多様性と統一された国民文化という一見相反する事柄を反映したものなのだと言主張するのである。

とはいうものの、特定の民族の歌舞であると指摘されたのは表4中の「ティベット節」（通し番号9番）と「ドゥルガーの舞」（通し番号15番）のみであった。大部分は特定の

14) 表4中、15番目の演目の原題に含まれる「Chandi」がサンスクリット語においてドゥルガーを意味することについては、石井薄氏のご教示をいただいた。演目の由来についてはネパール王国国立博物館のラウト氏からご教示をいただいた。

なお、ショーのプログラム中の題目が全て個々の曲名を表すわけではない。たとえば「ジャーウレ（本論の表4中、14番目の演目）」は曲名というより形式名であると思われる。

また、山田によれば、東ネパールのアートバハリア・ライと呼ばれる人々の間に女装した男性が行う歌舞があり、マンダル・マルニーと呼ばれている（山田1986: 72）。文化バラエティ・ショーのプログラム中の「ミス第一大隊（本論の表4中、16番目の演目）」は過去、「マルニ・ダンス（Marni Dance）」という演題で行われていた。「ミス第一大隊」も山田の報告するライの歌舞に由来するものであるかもしれない。なお、ライもグルカ兵を輩出してきた民族である。

表4 1997年カーララートリ舞踊プログラムとその概要

通し 番号	演 題	出演者	概 要
1	歓迎の音楽	鼓笛隊	ネパール王国の国歌。
2	ククリの舞	舞踊団 (6名)	刀剣ククリを用いた舞踊。主にモンゴロイド系民族によって行われる。
3	グルカ長の挨拶	グルカ長	
4	ソラティー (Sorathi)	舞踊団 (5名)	特定の民族に限定されない歌舞。
5	皿の舞	舞踊団 (1名)	皿を用いた舞踊。
6	インドレーシュによる特別出し物	舞踊団 (1名)	舞踊団の一員による出し物。
7	額につけた赤いティカー	舞踊団 (2名)	ネパール映画の挿入歌。
8	舞台歌 (Stage Song)	舞踊団 (1名)	客席からの飛び入り歓迎の演目。
9	ティベット節 (Bhote Selo)	舞踊団 (4名)	タマンの民謡。
10	シャンジャリヤ (Jhanjariya)	舞踊団 (3名)	
11	ジャルハリ (Jalhari)	舞踊団 (2名)	網を用いて魚を捕る漁師の舞。特定の民族に限定されない歌舞。
12	ジョーカー (Joker)	舞踊団 (1名)	お笑い。
休 憩			
13	さらさらと流れるトリスリ河 にて	舞踊団 (3名)	特定の民族に限定されない歌謡曲。
14	ジャーウレ (Jhyaure [jhyāure])	舞踊団 (2名)	ダサインの際に歌われる民謡。
15	ドゥルガーの舞 (Chandi Nautch [caṇḍī nāc])	舞踊団 (4名)	ダサインの際に演じられる。ライの人々が外国人の前で舞うことが多い。
16	ミス第一大隊	舞踊団 (1名)	女装した若い兵士による舞踊。
17	ティカーによる特別の出し物	舞踊団 (3名)	ティカーという名の兵士に率いられた三人組による出し物。
18	舞台歌 (Stage Song)	舞踊団 (1名)	客席からの飛び入り歓迎の演目。
19	第一大隊ニュースと国際情勢 の歌	舞踊団 (1名)	時事問題等を、外国語を交えながら、おもしろおかしく読み込んだ歌。
20	ダマウリの思い出	舞踊団 (2名)	ネパール映画の挿入歌。
21	地球は我々みんなのもの	舞踊団 (2名)	
22	ジョムソンの市にて	舞踊団 (5名)	ジョムソン付近で歌われる歌曲。
23	我々の時代を何と呼ぼうか	舞踊団 (4名)	
24	カクテル・ダンス	参加者全員	

出典：王立グルカ・ライフル隊第一大隊「1997年カーララートリ舞踊プログラム」を元に作成した。

民族に限定されない、一般的な歌舞であった。

ともあれ、文化バラエティ・ショーのプログラムの中に示されるのは、多民族国家ネパールの国民としてのグルカ兵のアイデンティティであると言えよう。

5 祝福の印の授与に見る組織原理

次に、祭礼におけるパフォーマンスの中に軍隊の組織原理がどのように貫徹しているのかを見るために、ティカー儀礼の進行を記述したい。

その日の朝（10月11日）、礼拝所のそばの広場には、思い思いの服装にネパール帽を着用したグルカ兵たちが集結していた。ある者は連隊所定の平服を着、ある者はダウラ・スルワールと呼ばれるネパール風の長上着とズボンの上にブレザーを着ている。どちらにしても丸いネパール帽をかぶるのが当日の規定である。

広場にあるマウロのそばには、白い布をかけた机が置かれ、黄緑色のオオムギの苗（ジャマラー）が二皿、祝福の印（ティカー）として額に付けられる濃い桃色の練り物が一皿に盛られて置かれている。オオムギの苗は、ジャマラー・アオンスイーの日に種を蒔き、ティカー儀礼の日の朝8時5分にグルカ長と宗教教師、プジャーリーがとったものである。また、練り物は、宗教教師が調製したものであり、飯、水、ヨーグルト、朱の顔料に、粘りけをつけるためにすりつぶしたバナナを加えている。

午前9時5分になると礼砲隊が空砲とラッパを鳴らす。ティカー儀礼の開始である。まず、グルカ長がマウロに祝福を与えた後、宗教教師の額に祝福の印をつけオオムギの苗を渡す。祝福の印は額に大体、縦2センチメートル、横5センチメートルの楕円形の形につける。次に宗教教師がグルカ長に同様のことを行う。これが終わると、その他の人々の祝

福が始まる。まずプジャーリー担当士官が進み出て、グルカ長から祝福の印を、宗教教師からオオムギの苗を授けられる。さらに、プジャーリー担当士官は、祭礼期間中の奉仕に対する褒美として、頭に白いターバンを巻いてもらう。次にグルカ長はプジャーリー担当士官の下で働いた6人のプジャーリーたちに、祝福の印をつけてやり、褒美として10ポンド入りの封筒を一人一人に手渡す。また宗教教師はオオムギの苗を手渡す。その後は讃歌隊、礼砲隊の順で祝福の印とオオムギの苗の授与を受ける。残りのグルカ将兵は①大隊指揮官、②士官、③下士官、④グルカのその他の階級の順序で、グルカ長から祝福の印、宗教教師からオオムギの苗を授けられる。

祝福の印の授与が終わると、参加者たちは広場に用意された飲み物や軽食をつまむ。この日用意された軽食は、塩と香辛料で味付けされたためジャガイモと、小麦粉を練って円形にのばし乳脂で揚げた一種の不発酵パン（puri [puri]）であった。

ティカー儀礼は午前10時15分ごろに終了し、グルカ兵たちは家族や友人とデザインを祝うために帰宅する。大方の者はその日の午後には予定されているフルパーティー・セラウネ儀礼に参加しない。

ここで、軍隊組織との関連からティカー儀礼を分析することとしたい。祝福の印を授けるという行為は、宗教教師が演説の中で言及した通り目上の者が行う行為であり、その授受は社会的関係を確認するものであるとも言えよう。従ってグルカ長による祝福の印の授与は、彼が階級組織の頂点に立つことの象徴であり、部隊の階級組織を反映したパフォーマンスであるといえる。また、グルカ長と宗教教師が互いに祝福の印をつけあうことを同様に解釈するならば、デザインにおいて両者が対等な権威を持つことを示しているといえよう¹⁵⁾。グルカ長の権威は階級に裏付けら

15) 南真木人氏からのご教示によると、グルカ兵を多数輩出してきたマガールの一村落では、デザイン

れた権威であり、宗教教師のそれは宗教的権威であるといつてよからう。

ただし役割や階級という原理により整序されたティカー儀礼にも、現実の軍隊組織と矛盾する場面がある。それは大隊指揮官に対する祝福の印の授与である。大隊指揮官は礼砲隊の後でグルカ長から祝福の印を授けられているが、これは彼が自主的に行っていることである。慣習的行為でもなく、先に挙げた手引き書にも記載されていない。というのも、少なくとも1995年以前は大隊指揮官に就任するのは英国人士官であり、グルカ長は名実ともに第一大隊のグルカ兵の頂点に立つ士官であったからである。かつ、英国人大隊指揮官がティカー儀礼に参加することもなかった。そのため、グルカ長による祝福の印の授与は現実の軍隊組織に合致する儀礼的行為であったのである。しかし、グルカ長を越える階級の士官が出現した現在、グルカ長が上官である大隊指揮官に祝福の印を授けるというのは不適切ではないかという声もある。

史上初のグルカ兵出身の大隊指揮官の出現は、英国人とグルカ兵の間の待遇の平等化を印象づけるものであった。一方で、祝福の印の授与に象徴される組織原理と現実のそれとの間に、不一致をもたらすこととなったのである。

6 ダサイン・カードに見る祝詞の交換

グルカ兵のダサインは、大小様々な部隊により開催されているが、互いに没交渉というわけではない。各部隊はそれぞれ独自のダサイン・カードを作成し交換するほか、家族や友人たちにも送付し、祝意を分かち合う。ここではダサイン・カードの交換を通してグルカ兵たちが祝意を分かち合う領域をかいま見

ることとしたい。

第一大隊の場合、1997年のダサイン・カードはグルカ長によりデザインされ、6千枚が印刷された。グルカ将兵たちは、グルカ長からダサイン・カードを購入し使用する。1997年のダサイン・カードのデザインは次の通りである。カードは二つ折りであり、クリスマス・カードとよく似た体裁である。表紙には短い祝辞、第一大隊の名称、第一大隊の紋章が刷られ、赤と緑と黒の連隊色の縁取りがなされている。カードを開くと左頁には、ライオンにまたがり、偃月刀(えんげつとう)を用いて怪物マヒシャースラを殺害するドゥルガー女神の絵があしらわれ、右頁にはネパール語と英語の祝辞が刷られている。裏表紙はアンナプルナ山に臨む西ネパールの山村の風景写真である。

なお、1998年のダサイン・カードではネパールと英国の両国の国旗があしらわれ、国家主義的傾向が強まっているように思える。

一方、他の部隊から第一大隊に送られてきたダサイン・カードは「准尉及び軍曹クラブ」内にあるバーに一括して掲示される。以下は掲示された16枚のダサイン・カードの発送者もしくは発行者の一覧である。

1997年10月に「准尉及び軍曹クラブ」に掲示されていたダサイン・カードの発送者(もしくは発行者、掲示順)

- (1) 高級副官付き軍団第28陸軍教育中央部隊(教育及び訓練予備隊)
- (2) 王立スコットランド隊第一大隊グルカ増援B中隊
- (3) 王立グルカ・ライフル隊第一大隊
- (4) 皇太子妃王立連隊第一大隊グルカ増援中隊

ノの際に村の長(アダッチェ)が村の男性たちに祝福の印とオオムギの苗を与えるという。そのとき、村長と同年齢の男性は祝福の印を同様に村長に与えるが、年下の男性はこのような返礼をしないという。要するに祝福の印を相互に授与することが、両者の対等性を表しているのであり、筆者の見解を裏付ける材料となるものと考えられる。

- (5) シンガポール共和国警官隊グルカ分遣隊
- (6) ウェールズ歩兵訓練中央部隊グルカ実演中隊
- (7) 発送者不明
- (8) 王立グルカ・ライフル隊第二大隊 (1996年のダサイン・カード)
- (9) サンドハースト王立陸軍士官学校グルカ実演中隊
- (10) 陸軍人事中央部隊 (Army Personnel Centre)
- (11) カトマンズ小通過キャンプ (Small Transit Camp Kathmandu) ¹⁶⁾
- (12) 日本在住の退役グルカ兵
- (13) ネパール陸軍
- (14) ネパール・シルムール・クラブ (Nepal Sirmoor Club) ¹⁷⁾
- (15) グローバル・ビジネス・コネクト・ネパール・アンド・ネパール・リアル・エステイト (Global Business Connect Nepal & Nepal Real Estate) ¹⁸⁾
- (16) 女王グルカ輸送連隊

この一覧からわかるように、部隊単位でまわっていないグルカ兵、例えば陸軍人事中央部隊のグルカ兵でさえも、独自のダサイン・カードを作成している。また、クラブには掲示されていないが、当時、ボスニアの選挙監視活動のために派遣されていた第一大隊のB中隊からも、ダサイン・カードが送られてきたという。

第一大隊は、ネパール陸軍やシンガポール警察のグルカ分遣隊ともダサイン・カードを交換している。しかし、インド陸軍のゴルカ連隊とのカードの交換は公式的にはなされていない。もっとも、インド陸軍に勤めている

友人がいるような場合には、個人的にダサイン・カードの交換をしているという。

ダサイン・カードの作成と交換は、各部隊の独自性ならびに部隊を越えたグルカ兵の連帯を確認する機会となっているのである。一方で、第一大隊が公式的に祝意を分かち合う範囲が英国陸軍のグルカ部隊とネパール陸軍、シンガポール警官隊に限定され、インド陸軍のゴルカ部隊までは含まれないことがうかがわれる。

7 君主に対する忠誠の表象

次に英国・ネパール両国家の君主とグルカ兵との関わりが、ダサインにおいてどのように表象されるのか、ということについて見ていきたい。

まず、英国の君主との関係では、英国の軍隊行事につきものである英国国歌、「女王に神の祝福あらんことを」(“God bless the Queen”)の演奏がいつさいない。

次に、ヴィクトリア女王の職杖について触れる必要があろう。ヴィクトリア女王の職杖とは、第一大隊の前身の連隊の一つである旧第二連隊が、軍旗の代用として同女王より授与されたものである。この職杖はブロンズと銀により鑄造されており、頭部には王冠を支える3人のグルカ兵がデザインされている。後にジョージ5世の後となったメアリ皇太子妃が1906年に旧第二連隊を訪れこの職杖を手に取り、熱心に銘文を読んだ際には、そばに立っていたグルカ兵が「この職杖の価値が増した」として喜んだと伝えられている(Mason 1974: 381)。要するに、この職杖は、英国人士官らによるグルカ兵の表象においては、英国陸軍およびそれを統帥する英国君主への忠誠心の象徴として登場する。

16) 「カトマンズ小通過キャンプ」とは、賜暇で帰国中のグルカ兵が利用する施設である。

17) 「ネパール・シルムール・クラブ」とは、旧第二連隊の退役兵のクラブである。

18) 「グローバル・ビジネス・コネクト・ネパール・アンド・ネパール・リアル・エステイト」とは、退役グルカ兵が経営する会社である。

しかしながら第一大隊のグルカ兵たちは、この職杖をニシャーニ・マイ (Nishani Mai) と呼び、女神であるとして信仰の対象にしている。ダサインの第9日マールの日には、この職杖もマウロに陳列される。

このことは、英国人士官らが英国陸軍及び君主への忠誠心の象徴として見なして来たものが、グルカ兵の間で別の信仰・観念へと変形されて、ダサインをめぐる意味的世界へと取り込まれていることをしめすものである。

では、ネパール国王に関してはどうか。先に述べたように、グルカ各部隊の指揮系統は全くネパール君主とは無関係である。しかしダサイン祭礼ともなると、時にはネパールの王族の臨席を仰ぐことにもなる。実際、1996年のダサインにはネパールの皇太子が訪れている。また、旅団公認の雑誌である『パールバティー』(Parbate [pārbatī]) 誌(右段以降参照)10月号の巻頭にはネパール国王のメッセージが掲載されている。1997年10月号の同誌では、国王は「すべてのネパール人が、母国に対する義務を忘れることなく全人類の幸福及び平和、繁栄に身を捧げるよう、ドゥルガー女神が鼓舞遊ばされんことを」と祈願する短文を寄せている。また、すでに述べたように、カーララトリの日の文化バラエティ・ショーではネパール国歌が演奏される。ネパール国歌の歌詞は、国王の知恵と勇気をたたえ国王のネパール統治を願うという内容である¹⁹⁾。

しかしながら、ネパールで行われるダサインに比べれば、ネパール国王の存在感が稀薄であることは否めない。何となれば、忠誠の対象としての君主の象徴は多用されない。第一大隊のダサインで祝福の印を与えるのは、あくまでも階級組織の頂点に立つグルカ長であり、ネパール国王ではない。ネパール国王の位置づけはあくまでも来賓としてのそれである。

これは、第一大隊にも数多く含まれる民族であるグルンの村のダサインにおいて、各家庭の家長が首長のところへと赴き国王の名による祝福の印を授かっていたことと比べれば対照的である (Messerschmidt 1976: 71)。

以上のことを見るならば、グルカ兵と英国女王、そしてネパール国王との間の権力関係及び忠誠は、第一大隊のダサインの主題ではないといえよう。グルカ兵は国民として表象されはするが、臣民としてではない。

8 軍隊文化としてのダサイン

これまで見てきたように、第一大隊のダサインにおいては至るところで「ネパール文化」なるものの再生産が見られる。しかし、第一大隊のダサインは祖国ネパールのダサインをそのまま複写したものではない。第一大隊のダサインが優れて軍隊の祭礼であるということ忘れてはならない。

まず、第一大隊のダサインは英国陸軍のグルカ部隊ならではの要素を数多く持っている。例えばバグ・パイプによる演奏は故国ネパールのダサインでは見られないものであろう。また、武器の礼拝や、儀礼の開始、供儀の執行等、要所要所で空砲をならすことなど、フラワーが王権の儀礼として取り上げたナヴァラトリと共通する要素が多々見受けられる (Fuller 1992: 106-127)。これらは庶民生活のダサインではまず見られない要素であろう。祝福の印の授与が軍隊の階級組織に沿って行われることも、軍隊の祭礼ならではのパフォーマンスであるといえる。

しかし、ダサインと軍隊生活とは似合わないものだと違和感を感じる向きもある。ここではその一例として『パールバティー』誌に掲載された新兵の随筆を取り上げたい。

この雑誌は旅団の公式的出版物ではない

19) ネパール国歌の歌詞については佐伯による和訳を参照した (佐伯 1992: 863)。

が、1997年当時、その編集部は高級副官付き軍団第28陸軍教育中央部隊（教育及び訓練予備隊）内に置かれ、英国人少佐1名とグルカ兵の伍長とが編集にあっていた。旅団が公認する雑誌であると見てよい。なお、パールバティーとはシヴァ神の妻とされる女神の名前である。

『パールバティー』1997年10月号ではダサイン特集が生まれ、ダサインの由来や進行についての解説やネパール国王の祝辞などが掲載された。また、投稿欄にはダサインにちなんだ詩や随筆が掲載された。その大半はダサインを迎える喜びを素朴に表現したものであったが、冒頭に掲載された新兵ビマル・ライの随筆だけは、外国の軍隊において迎えるダサインに対する屈折した心情を表現している。以下、この随筆の一部を紹介したい。

「ダサインおめでとう」（一部）

心が田畑の青々とした稲と色とりどりの花を望むようになったならば、これはネパールの大祭であるダサインとティハールの訪れを告げるものだ。外国に滞在するネパール人の場合には、カレンダーに記された「ガタスターバーナー」ということばを見て母国のことを思い出す。グルカ兵たちは、祖国の服であるダウラ・スルワールやダッカ地のネパール帽を身につけることもなく、ジャングル帽と長靴で自らをカモフラージュしているが、頭の中では、首にマリゴールドとベルベットの花輪を巻き、額にヨーグルトと米でつくった祝福の印をつけている自分の姿を思い浮かべていることであろう。

この私とは言えば、兵士に分け与えられた菜園に自分のカダム（アカネ科の植物、学名は *Nanlea cadamba* 及び *Anthocephalus cadamba*）をうまく植えることができたことと誇りに思いつつ、新兵用のライフルと長靴の金具の中に人生の意

義を求めようとしている。熱い弾丸を風の中に飛ばし、人形を銃剣で突き刺し、戦争の技術を習い覚えている。「訓練で汗を流しておけば、戦争で血を流さずにすむぞ」という上官や教官の教えを身につけて兵士になるために努力をしているのである。（Rai 1997）

この随筆においては、ダサインと外国における軍隊生活とが対比されている。新兵ビマル・ライにとって、ダサインとは、田畑の作物の生長、花輪、祝福の印などに満ちた故郷の平和な生活を象徴するものである。一方、軍隊生活は、弾丸、銃剣、軍服などに象徴される殺伐としたものとして描かれる。そしてとまどいながらも、軍隊生活に適応し、人生の意義を見いだそうとする自分の現状を率直に告白しているのである。

実際には、英国陸軍のグルカ旅団でもダサインが行われ、ダウラ・スルワールを着用し祝福の印をつける。また、祖国ネパールの軍隊においてもダサインは大々的に祝われている（石井 1992a: 77-78）。なり立ての新兵が考えるほどには、故郷のダサインと軍隊生活とは相互に二律背反することがらではない。しかし、見ようによっては厭戦思想につながらなくもない新兵の随筆が、『パールバティー』誌の投稿欄の冒頭を飾るのには、この随筆が他のグルカ兵たちの郷愁に訴えるところがあるからであろう。英国の10月の天候は沈鬱であり、それだけに「ネパールのもっとも美しい時季に行われる」とグルカ兵が主張する故郷のダサインを思い起こさせるのである。

9 民族的多様性とダサイン

宗教教師は、ダサインはネパールの多様な民族文化の統一性を示すものだと主張する。しかしながら、政策決定とは無関係である一般兵士に焦点を当てて見れば、ヒンドゥー教を基調とするネパール文化の構築に全てのグ

ルカ兵が諸手をあげて同意しているわけではない。

例えば、仏教徒グルカ兵やキリスト教徒の中には、ダサインそのものから距離を置こうとする者もある。

筆者は、グルカ兵らと歓談している際に、アーリア系と思われる彫りの深い顔立ちをした下士官に「我々グルカは東インド会社に雇われていた17世紀からダサインをやってきたんだ。それほどまでにグルカのダサインの歴史は長い。外国人にそう簡単にわかるわけがない」と一蹴された。が、彼がその場を立ち去り、モンゴロイド系と思われる顔立ちの兵士ばかりになると、今度は別の下士官が筆者に向かって「ネパールには、モンゴロイドの人々とアーリアンの人々の両方がいる。ヒンドゥー教は、後からやってきたアーリア人の宗教だ。だから、ダサインは我々仏教徒には関係ない祭礼だ」と主張した。別の場面では「私の村では最近若い人がヒンドゥー教徒から仏教徒に改宗している。ヒンドゥー教の教えはむずかしいし、カースト制があるからだ」と述べる兵士もあった。これらの見解が果たしてどの程度グルカ兵の間で共有されているのかは本稿では断定できないが、ヒンドゥー教を基調とした国民文化のあり方を否定しかねない見解が非公式な場において語られることは注目される。全てのグルカ兵が常にヒンドゥー教徒というアイデンティティを選択するわけではないということを強調しておきたい。

また、部隊で行われているダサインが、故国ネパールで行われているダサインの公約数的なものであるという見方もある。例えばある上級下士官はこう語る。

「英国人は自分が見た村のダサインだけが唯一のダサインだと思っているが、本当は非常にたくさんのやり方があるのだ。例えば、今ここにいるA君はマガールだが、彼の村ではダサインのことをブメ・プージャーと呼んでいる。ブメというのは土地の神のことで

あり、地に頭をすりつけて土地の神への礼拝(プージャー)をしてから祭りが始まる。こういう調子だから、グルカ兵のそれぞれが皆、自分のやり方でダサインをするのだと主張しかねない。そこで宗教教師が部隊のダサインのやり方をきめ段取りをまとめ、その企画をグルカ長のところに持っていったのである」。

実際、家族を駐屯地へ同伴することが許可されているグルカ将兵たちは、自宅では故郷のやり方でダサインを行っているという。上級下士官のこの言葉は、部隊で行われているダサインが、ちょうどネパール語が言語において果たしているのと同様な、いわば「儀礼のリング・フランカ」としての位置にあることを示すものである。

VI 考察

本章ではこれまでの記述と分析にもとづき、以下の問題に答えることとしたい。まず第一に、ダサインにおいてグルカ兵たちは何を表明しようとしているのか。第二に、それにより、グルカ兵のどのような集団的アイデンティティが表象されるのか。

結論から先にいえば、ダサインは、グルカ兵が「ネパール人」としての国民アイデンティティと階級組織により統合されていることを誇示するパフォーマンスである。以下、その根拠を述べていきたい。

1 「ネパール文化」の再生産と国民アイデンティティ

まず、ダサインに「ネパール文化」を忠実に再生しようとする意図を見て取るのは容易である。グルカ長や宗教教師は、「ネパール文化の維持」が祭礼の目的だと言明する。さまざまな場面で、ネパール人としての意識を鼓舞するような働きかけがグルカ兵に対してなされている。大部分の行事において、ネパールの礼服であるとも言えるダウラ・スルワール(上着と体にぴったりとしたズボン)も

しくは丸いネパール帽の着用が義務づけられている。デザイン・カードはネパール陸軍とも交換され、故国ネパールとの結びつきが強調される。文化バラエティー・ショーのプログラムはネパール国歌の演奏で始まる。グルカ兵が日頃インドの歌謡曲に親しんでいるにも関わらず、文化バラエティー・ショーで演奏されるのはネパールの歌曲ばかりである。旅団公認の雑誌には、故国のデザインを懐かしむ随筆が掲載される。1995年に「適切な名称にする」ことを目的として祭礼の名がネパール風に変えられたが、それもこのようなデザインのネパール化の一環であるといえよう。

供犠に関しては、英国の動物愛護運動に配慮してクビンドで代用しているのだが、祖国ネパールに存するような供犠の方法を採用している。その代わりに、水牛の供犠は在ネパール英国グルカ隊が「全体を代表して行う」。グルカ旅団のデザインは、ネパールに駐在する部隊のデザインを加えることで完結するのである。

この「ネパール文化」なるものの基調を成すのは、ネパールの国教であるヒンドゥー教と多元文化主義的理念である。

まず、公式的パンフレットにおいては、古代インド叙事詩等に依拠して、祭礼の由来が説明される。祭礼はその細部に至るまで、司祭カーストの出身でありネパールの大学でサンسكريット学を学んだ宗教教師により企画され、古代インドの叙事詩や神話に則って進行する。このようにして、グルカ兵がヒンドゥー教徒としての義務を怠らないこと、また彼らの祭礼が宗教的正統性をもつことなどが、内外に向かって示されるのである。

しかしながら、グルカ兵は多様な民族から構成されており、ヒンドゥー教を基調とする国民文化が表象されることに対して違和感を持つ兵士もある。このような民族的多様性に配慮しているのか、グルカ長らはバラエティー・ショーでは各民族の歌舞を演じるのだと

主張する。このことは、軍隊文化の構成において特定の民族・カーストのそれのみが優遇されるのではなく、各民族のそれが平等に寄与すべきであるという理念の表明でもある。

もっとも、ネパールの文化の「多様性の中の統一を示す」とされるデザインがヒンドゥー教の宗教的正統性を重視して構成されることは、各民族の多様な文化がヒンドゥー教のもとに統合されるのだとする見解を示すことにもなる。付言すれば、これは故国ネパールにおいて国民国家形成の途上用いられてきた政治的レトリックとよく似たものである。バーガートらによれば、現役グルカ兵らが生育してきた「パンチャーヤット時代」(Pfaff-Czarnecka 1997: 433-434)、公的なレトリックにおいてネパールは共通の文化を共有する平等な市民から構成される国家であるとして示されたが、その「共通の文化」なるものは、支配する側に立つ山地ヒンドゥー教徒(Parbatiya Hindus)に由来する文化要素であったという(Burghart 1984: 121; Pfaff-Czarnecka 1997: 434)。

以上述べてきたようなネパール文化の強調を通して示されるのが、ネパール国民としての集団的アイデンティティであることに異論はなかろう。翌1998年のデザインにおいて、デザイン・カードに英国国旗とネパール国旗があしらわれたことは、ネパール国民としてのアイデンティティをさらに強調する試みであった。

宗教教師の演説に見られるように、デザインでは冷静な判断力により勝利を手にするという理想的人格のモデルも提示される。「ネパール国民」は帰属の在処のみでなく、道徳的方向付けをも示すアイデンティティなのである。

しかし、ネパール国民であることを強調しネパール文化の再生産に努めてきたからといって、祖国における政治的レトリックが第一大隊のデザインにそのまま生産されているというわけではない。バーガートは、ヒンドゥー

一王権というネパールの政権の特徴付けは、宗教的紐帯により王と臣民の忠誠関係を構築する上で重要であったと、述べている (Burghart 1994: 6)。一方、第一大隊のダサインにおいては、君主とグルカ兵との関係を象徴する要素は稀薄である。グルカ兵のアイデンティティは、臣民としてよりも、むしろ国民として表象されるのである。

第一大隊のダサインは、フラーが取り上げた王権の儀礼 (Fuller 1992: 106-127) と多くの点で類似しているが、根本的な違いはその点にある。これは、統率の主体 (英国の君主) と「最終的忠誠 (Nehru 1947)」の方向 (ネパールの君主) とが異なるという、グルカ兵の立場の特殊性によるものと思われる。

ともあれ、ここまでの分析により、以下の二点が明らかになった。第一に、ダサイン祭礼においては、「ヒンドゥー王国ネパールの国民」「冷静で知的な人物」といった人物像が示される。それは植民地主義的表象であるとしてカプランに糾弾されたマーシャル・レイスの表象 (Caplan 1995) とは明らかに異なる。冒頭述べたように、英国人士官の回想録等に描かれるグルカ兵は、ヒンドゥー教の些末な儀礼に拘泥せず、正直で勇敢だが、必ずしも知的ではないといったものであった。また「真のグルカ」は必ずしもネパール国民と一致するものではなかった。要するにグルカ士官たちは、英国人指揮官や在野の軍事マニアらが発展させてきたものとは異なる方向へと、自己表象を構築しているのである。

つまりグルカ兵は、グルカ兵の徴募に応募する時にはマーシャル・レイスの表象に迎合しそれを活用、ダサインにおいてはそれとは異なる内実を持った国民アイデンティティを誇示するというように、状況に応じたアイデンティティの使い分けを行っていることになる。

第二にダサイン祭礼は、「ネパール国民」が、多民族から構成されるグルカ兵を統合する包括的アイデンティティとして機能してい

ることを如実に示すものである。グルカ長の指揮により運営されるダサインは、「ネパール国民」というグルカ兵の集団的アイデンティティとその望ましい文化とを内外に示す祭礼であるといえる。

2 階級の儀礼としてのダサイン

一方、第一大隊のダサインが、階級組織に基づく部隊の統合を内外に誇示する場ともなっていることも見逃すことはできない。

ダサインの運営のために必要な作業は、パン焼きから手引き書の印刷に至るまで、実に膨大である。祭礼は効率よい分業なくしては成り立たない。この分業体系は、階級と技能、経験、民族・カースト的出自に基づいて構成される。そのために、グルカ兵は少なくとも15年にまたがる勤務の中で様々な立場においてダサインを経験するものの、全ての役割を経験するというわけではない。例えば、司祭としての役割は宗教教師に限定され、プジャーリーや讃歌隊の成員も、その民族・カースト的出自により自ずから限定される。その他の職務については出自に基づく限定はないというものの、やはり、特定のグルカ兵が経験する職務は限定される。例えば、バラエティ・ショーにおいて女装するのは、眉目秀麗の若年兵士に限定される。そして一度、舞踊隊を経験したものは、その経験を買われてその後も何度か舞踊隊に入ることになる。また、本部付き中隊の諜報部に所属する将兵は、もっぱらビデオ及び写真担当士官およびその手伝いとして働くことになる。このことは全てのグルカ兵がダサインの運営にかかわる知識を同程度保持するわけではないということの意味する。それはダサインの運営を統括するグルカ長でも同様である。

もっともグルカ長が全ての仕事の委細に通じる必要はない。彼が知っておかねばならないのは、各職務の概要と、誰が適任者なのかということのみである。彼は個々のグルカ将兵の階級、所属、民族・カースト的出自、技

能、経験を把握し、要所要所に適切な人材を配置することで、よく統制の取れたダサインを運営し、「ネパール文化」を再生産する。ダサイン運営のための「帝王学」というものがあるとすれば、この種の知識こそがそれである。

グルカ長に就任する人物は過去、ダサイン担当副士官（組織委員会副委員長）や事務官、事務官補佐などを歴任していく中でこの種の知識を獲得していくものと思われる。ダサインで要職を経験することが昇進の必須条件であるとは言えないであろうが、将来を嘱望されている人物がこの種の役割をあてがわれることはある。実際、グルカ長に「優秀である」として目をかけられていた下士官は事務官補佐に任命され、手引き書や由来説明の作成など様々なしごとを手がけていた。過去のダサインに関する書類や記録類も保存されており、彼はそれらを参照しながら「帝王学」の核心へと接近していくのである。

グルカ長の指揮のもとに一条乱れず祭祀が行われることは、グルカ将兵の自律的統率を英国陸軍に印象づける示威行動となっていると考えられる。このような組織統制に関わる知識を抱えていることこそがグルカ長の権力の源である。彼らの上官である英国人士官といえどもその全てに通暁しているわけではない。だからこそ、「(大隊指揮官といえども)グルカ長の見解をあっさりと無視するようなことはしない」のである(House of Commons 1989: xxxvii)。

ティカー儀礼はこのようなグルカ長の地位を象徴的に示すパフォーマンスである。祝福の印の授受は、両者の上下関係の再確認という意義を持つものであり、グルカ長から全てのグルカ将兵に祝福の印が授与されることは、グルカ長が階級組織の頂点に立つことの象徴である。これは宗教が社会のあり方を反映するという、「主知主義」(山崎 1995) 的図式を満足させる儀礼であるともいえよう。

もっとも厳密に言えば、1995年のグルカ

出身の大隊指揮官の出現により、祝福の印の授与に象徴される組織原理と現実のそれとの間には不一致がもたらされている。現時点ではこれは例外的な事態にとどまっているといつてよいと思われる。何となれば、グルカ兵出身の大隊指揮官ならではの役割は現在のダサインにおいては存在しない。また、他の大隊では未だに大隊指揮官は英国人である。しかし、これが今後のダサインの運営のあり方やグルカ兵内部の権力構造を変えていく端緒となる可能性もなくはない。注意深く見守っていく必要があろう。

ともあれ、祝福の印の授与は軍隊の階級組織を象徴するパフォーマンスであるといつてよい。ひるがえって庶民生活のダサインを見てみるならば、祝福の印は親族の年長者により授けられるものであり、そのため、祝福の印の授与は親族の上下関係を分析する際に注目されてきた(例えば Bennett 1983)。第一大隊のダサインは、祖国において見られるレパトリーを活用する事により、階級組織による統合を示しているものと考えられる。

ただし、グルカ長がダサインの運営にあたって行使するのが個人的な権力ではないことを、ここで確認しておきたい。彼の権力と知識は、グルカ長という役職に付随したものであり、彼個人もしくはその家柄に属するものではない。しかもグルカ長に相当する階級である少佐の任期は3年にみたく、その後は大方のグルカ長が退職して帰国するのである。

また階級により拠出金の額が異なるということもない。兵卒も士官も平等に毎月1ポンド拠出する。パトロンとしても平等なのである。

むしろ、グルカ兵の統率にかかわる知識とは、グルカ兵を輩出してきた集団に属する知識であるというべきであろう。そのうち統率にかかわる部分の知識が、グルカ長に就任した人物に一時的に配分されるにすぎない。それは外国の陸軍に勤務し弱い立場に置かれがちなグルカ兵の切り札の一つであり、かつ外

国の陸軍における雇用を長期にわたり確保してきた集団の知恵であるともいえる。

本稿では第一大隊のダサインにおいて「ネパール文化」の再生産が見られると繰り返し指摘してきたが、それは祖国の文化の単なる引き写しではない。ダサインは、軍隊文化の中でグルカ兵を統合する包括的アイデンティティとその望ましい民族文化とを表明しようとする政治的パフォーマンスなのである。

VII 結 論

本論では、英国陸軍グルカ兵の集団アイデンティティの自己表象のあり方を明らかにすることを目的として、英国陸軍王立グルカ・ライフル隊第一大隊のダサイン祭礼の記述と分析を行ってきた。

その結果、ダサイン祭礼において、国民アイデンティティと階級にもとづくグルカ兵の統合が誇示されていることが明らかとなった。「ネパール国民」はグルカ兵を統合するための包括的アイデンティティとして公的に認知されており、ダサイン祭礼は国民アイデンティティの要素となる「ネパール文化」のあり様を内外に示す祭礼なのである。この「ネパール文化」なるものは、ヒンドゥー教と多元文化主義的理念とに特徴づけられる。

その一方で、第一大隊のダサインにおいては君主と兵士の関係を象徴する要素は稀薄である。グルカ兵は臣民としてではなく、国民として表象される。これは統率の主体（英国の君主）と「最終的忠誠（Nehru 1947）」の方向（ネパールの君主）とが異なることに関係していると思われる。

また、宗教教師の演説において見られたように、ダサインにおいては、冷静で知的な人物像が理想として示される。

以上述べてきた「ヒンドゥー王国ネパールの国民」「冷静で知的な人物」といった人物像を、英国人士官らにより構築されてきたグルカ兵の表象と比べてみると違いは明らかで

ある。冒頭述べたように、英国人士官の回想録等に描かれるグルカ兵は、ヒンドゥー教の些末な儀礼に拘泥せず、正直で勇敢だが、必ずしも知的ではないといったものであった。また「真のグルカ」は必ずしもネパール国民と一致するものではなかった。

要するに、グルカ将兵の指揮の現場において構築された自己表象は、英国人士官によるそれとは異なる方向へと展開しているのである。

本稿ではダサインの運営についても記述・分析を行い、祭礼がグルカ長を初めとするグルカ兵上層部によって指揮され、上意下達の階級組織にそって運営されることを明らかにした。グルカ長の指揮の元、粛々と祭礼が実施されることは、グルカ兵の統合とグルカ長のリーダーシップを誇示することにもなる。したがってダサインの運営をめぐる知識は組織統制にかかわる知識としての側面をももつ。これはグルカ兵の上層部が学ぶべき「帝王学」と密接にかかわっている。しかし、この知識は特定の個人や家柄に属すると言うよりも、長年にわたりグルカ兵を供給してきた集団に属するものであり、グルカ兵の自律的統率にかかわる知識なのである。ダサイン運営のあり方は、外国陸軍における雇用を超世代的に継続させてきた集団の知恵をかいま見せるものでもある。

世界各地の駐留先で行われてきたグルカ兵のダサインは、その民族文化の精華を示すものとして、英国人士官たちのエキゾチシズムに対する嗜好を満足させてきた。また、グルカ兵たち自身にとっても、故郷への郷愁をかき立てる機会となっている。しかしながらダサインがただ単にグルカ兵のエスニシティの自然の発露であると見なしたならば、それはこの祭礼の本質を見誤ることとなる。本稿でも見てきたように、ダサインの進行や儀礼の細部は、歴代のグルカ長や宗教教師などの聖俗双方のグルカ兵の指導者によって周到に企画され運営されてきた。ダサインとは、多

民族から構成されるグルカ兵を統合するようなアイデンティティとその望ましい文化とを表明しようとする、政治的パフォーマンスなのである。

このようなグルカ兵の自己表象は、集団としてのグルカ兵がおかれた状況や英国陸軍人事政策などに規定されている。その背景については、別稿（上杉「英国陸軍グルカ旅団の宗教政策（印刷中）」）で解明を試みたので参照されたい。

最後に今後の課題として三点指摘しておきたい。

まず、デザインの行事のうち、筆者が直接的に参与観察することを許可されたのは、第7日（1997年10月8日）と第10日（1997年10月11日）の行事のみであった。これらはどちらも、グルカ兵のみが参加する行事であった。したがって筆者が参与観察によって得たデータは主に、内向きに示された集団的アイデンティティに関するものであるといえる。一方、英国人士官や来賓等も参加する行事においては、異なる集団的アイデンティティが示されている可能性がある。その解明と比較は別途の課題としたい。

次に、本稿においても、デザインのあり方に関して、公的見解とは異なる個人的見解が並存することを指摘した。が、それらの見解がグルカ兵の軍隊文化の中でどのように位置づけられるのかについては、十分に論じることができなかった。また、本稿で扱ってきた公的な集団アイデンティティと兵士個人が下から構築する集団アイデンティティがどうかみ合うのかは、さらなる調査と分析を必要とする問題である。今日のネパールの民族間関係や言論界の状況、並びに南アジア各地のネパール移民の政治的動向を考慮するならば、個々の兵士のレベルにまで降りていき、兵士のアイデンティティのありかを押さえておくことは大いに意義のあることであると考えられる。現在は主流ではないように見える兵士たちの見解が、今後影響力を強めていく可能性

も否定できないからである。今後の調査研究の課題としておきたい。

最後に、類似の祭礼（ダサイン、ナヴァラートリ、ダシェラー等）はネパール陸軍その他においても行われている。軍隊における伝統の維持と再生産についてより知見を深めるためにも、これらの祭礼の記述と相互比較が求められよう。

付 記

本論が依拠する調査資料は、英国陸軍第四師団メディア作戦本部の許可を得て収集された。また、本論で参照した未公開資料及びすでに刊行されていない出版物の多くは、主に大英図書館のオリエンタル・アンド・インディア・オフィス・コレクションズ及びソーシャル・ポリシー・インフォメーション・サービス、ロンドン大学スクール・オブ・オリエンタル・アンド・アフリカン・スタディーズ図書館、グルカ博物館において閲覧をした。

本論を執筆するにあたっては、多くの方からご援助とご厚情を賜った。

まず、日本放送協会ヨーロッパ総局長今井義典氏及び常設合同本部メディア作戦本部のホーグッド大佐、日本放送協会放送文化研究所の中村美子氏は、英国陸軍第四師団メディア作戦本部への紹介の労をとって下さった。

また、ロンドン大学スクール・オブ・オリエンタル・アンド・アフリカン・スタディーズのカプラン教授は調査研究中終始暖かい励ましを与えて下さり、貴重なご助言を惜しみなく与えて下さった。本論の元となった報告書（Uesugi 1998）には、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の石井溥教授、グルカ旅団のラングランズ中佐、在英国ネパール大使館のプラサイー等書記官、ブルネイ大学のフサインミヤ教授、国立民族学博物館の南真木人氏、九州大学大学院のバッタライ氏も目を通して下さり、貴重なコメントをして下さった。公文書係のエドガリー・ハリス氏を初めとするグルカ博物館のスタッフ

は、筆者の文献探索に協力して下さった。大阪市立大学大学院のパタク氏はネパール語の筆記録の作成を手伝って下さるとともに、ネパール文化・社会について多々ご教示をして下さった。ネパール王国国立博物館のラウト氏は文化バラエティ・ショーの演目について解説をして下さった。本論の草稿には京都大学人文科学研究所の田中雅一助教授が目を通して下さり貴重なコメントをして下さった。

筆者は本論のあらましを1998年に日本民族学会第32回研究大会で、1999年に京都大学人文科学研究所「植民地主義と人類学」研究班（山路勝彦関西学院大学教授・京都大学客員教授代表）研究会で発表し、多くの方から貴重なコメントをいただいた。

以上の方々に心から感謝申し上げます。

最後になったが、言うまでもなく、グルカ旅団の将兵及び宗教教師の方々の寛大なご協力なくしては、そもそもこの研究自体不可能であった。その全ての方のお名前をここに記すことはできないが、王立グルカ・ライフル大隊第一大隊大隊指揮官のラウト中佐、1997年当時のグルカ長であったグルン少佐(QGO)、1998年のグルカ長であったタバ少佐(QGO)、グルカ旅団本部事務官のタバ少佐(QGO)、リトル少佐、宗教教師のガイレ氏、ダハール氏、グルン軍曹、グルカ博物館のライ氏、プルジャ氏、ラナ氏を初めとするグルカ旅団将兵諸氏に最大級の感謝を捧げたい。

なお、本論において表明されている見解は

筆者個人のものであり、英国陸軍及び英国国防省のそれを反映したものではない点、お断りしておく。

凡例 本稿におけるアルファベット表記について

本稿では、以下の原則にもとづいて原語の表記を行っている。

- ①丸括弧 () 内には調査当時グルカ旅団において用いられていたアルファベット表記を記した。さらに必要に応じてブラケット [] 内には該当するネパール語のアルファベット表記を示した。
- ②ネパール語のアルファベット表記は以下の原則に基づいている。
 - i) 長母音は母音の上にアッパー・バーを引いて示す。例 [pūjā]
 - ii) 帯気音は子音文字のつぎに h を付けて示す。例 [bhandā]
 - iii) 無声歯擦音は sh と表記する。例 [shrāwan]
 - iv) 反舌音は子音の下に黒い点を付けて示す。例 [ṭoli]
 - v) 鼻音化音は母音の上に波線を引いて示す。例 [dasai]
 - vi) 軟口蓋の鼻音は n の上に点を付けて示す。例 [saṅkrānti]
 - vii) 口蓋歯茎鼻音は n の上に波線を引いて示す。例 [pañcāyat]

引用文献

公刊された文献

- Anderson, Mary M. 1988 [1971] *The Festivals of Nepal*. Calcutta: Rupa.
 Banskota, Purushottam. 1994. *The Gurkha Connection: A History of the Gurkha Recruitment in the British Army*. Jaipur: Nirala Publications.
 Bennett, Lynn. 1983. *Dangerous Wives and Sacred Sisters: Social and Symbolic Roles of High-caste Women in Nepal*. New York: Columbia University Press.
 Burghart, Richard. 1984. The Formation of the Concept of Nation-state in Nepal. *Journal of Asian Studies* 44 (1), 101-25.

- . 1994. The Political Culture of Panchayat Democracy. In Michael Hutt (ed.) *Nepal in the Nineties: Versions of the Past, Visions of the Future*, pp. 1-13. Delhi: Oxford University Press.
- Caplan, Lionel. 1970. *Land and Social Change in East Nepal: A Study of Hindu-tribal Relations*. London: Routledge & Kegan Paul.
- . 1995 *Warrior Gentleman: "Gurkhas" in the Western Imagination*. Providence: Berghahn Books.
- Cohen, Stephen P. 1971. *The Indian Army: Its Contribution to the Development of a Nation*. Berkeley: University of California Press.
- Collett, Nigel 1994. The British Gurkha Connection in the 1990s. In Michael Hutt (ed.) *Nepal in the Nineties: Versions of the Past, Visions of the Future*, pp. 98-105. Delhi: Oxford University Press.
- Cross, J. P. 1986. *In Gurkha Company: the British Army Gurkhas, 1948 to the Present*. London: Arms and Armour Press.
- Des Chene, Mary Katherine. 1991. Relics of Empire: A Cultural History of the Gurkhas, 1815-1987. Unpublished PhD thesis, Stanford University.
- . 1999. Military Ethnology in British India. *South Asia Research*, 19, 2, 121-135.
- 永ノ尾信悟 1993 「ブラーナが記述する秋の女神の大祭」『東洋文化』73: 121-163。
- Enloe, Cynthia H. 1980. *Ethnic Soldiers: State Security in Divided Societies*. Athens: The University of Georgia Press.
- Farwell, Byron. 1984. *The Gurkhas*. London: Allen Lane.
- Forbes, Duncan. 1964. *Johnny Gurkha*. London: Robert Hale.
- Fuller C.J. 1992. *The Camphor Flame: Popular Hinduism and Society in India*. Princeton: Princeton University Press.
- Gibbs, H. R. K. 1944. *The Gurkha Soldier*. Calcutta: Thacker, Spink & Co.
- Gurung, Harka. 1997. State and Society in Nepal. In David N. Gellner, Joanna Pfaff-Czarnecka and John Whelpton (eds) *Nationalism and Ethnicity in a Hindu Kingdom: The Politics of Culture in Contemporary Nepal*, pp. 495-532. Amsterdam: Harwood Academic Publishers.
- Izuyama, Marie. 1999. British Imperial Strategy and the Gurkha Negotiations. 『南アジア研究』11: 51-70。
- Heyman, Charles (ed.). 1997. *The British Army Pocket Guide 1997/1998*. Barnsley: Pen & Sword Books.
- Hodgson, Brian H. 1972 [1833]. Origins and Classification of the Military Tribes of Nepal. In Brian H. Hodgson (ed.), *Essays on the Language, Literature and Religion of Nepal and Tibet Part 2* (Bibliotheca Himalayica series 2 vol. 7), pp.37-44. New Delhi: Manjusri Publishing House. Reprinted from *Essays on the Language, Literature and Religion of Nepal and Tibet*. London: Trubner & Co., 1874. Originally read before the Bengal Asiatic Society, 9th January 1833 and published in *Journal of the Bengal Asiatic Society* 2, 217-224.
- Höfer, András. 1979. *The Caste Hierarchy and the State in Nepal: A Study of the Muluki Ain 1854*. Innsbruck: Universitätsverlag Wagner.
- House of Commons, Defence Committee. 1989. *First Report: The Future of the Brigade of Gurkhas*. London: Her Majesty's Stationery Office.
- Hutt, Michael. 1993 [1989]. A Hero or Traitor?: The Gurkha Soldier in Nepali Literature. In D. Arnold & P. Robb (eds) *Institutions and Ideologies* (SOAS Asia Reader), pp. 91-103. Richmond, Surrey: Curzon Press. First published in *South Asia Research* 9 (1) in May 1989 and reprinted in *Kukri: The Journal of the Brigade of Gurkhas* in January 1991.
- . 1997. Being Nepali Without Nepal: Reflections on a South Asian Diaspora. In David N. Gellner, Joanna Pfaff-Czarnecka & John Whelpton (eds) *Nationalism and Ethnicity in a Hindu Kingdom: The Politics of Culture in Contemporary Nepal*, pp. 101-144. Amsterdam: Harwood Academic Publisher.
- 石井 溥 1992 「グルカ」辛島昇他監修『南アジアを知る事典』p.214。東京：平凡社。
- . 1992 「デザインーネパールの秋の大祭」『季刊民族学』60, 72-83。
- Mason, Philip. 1974. *A Matter of Honour: An Account of the Indian Army, Its Officers & Men*. London: Jonathan Cape.
- Messerschmidt, Donald A. 1976. *The Gurung of Nepal: Conflict and Change in a Village Society*. Warminster: Aris & Phillips.
- Ministry of Defence. 1965. *Nepal and the Gurkhas*. London: Her Majesty's Stationery Office.
- 三尾 稔 1994 「女神祭祀の変容—インド・ラージャスターン州メーワール地方の事例から—」『民族学研究』58巻4号, pp. 334-351。
- Morris, C.J. (compiler). 1936 [1933]. *Gurkhas* (Handbooks for Indian Army). Delhi: Manager of Publications,

- Government of India.
- Mullaly, B.R. 1957. *Bugle and Kukri: The Story of the 10th Princess Mary's Own Gurkha Rifles*. Edinburgh: William Blackwood & Sons.
- 西澤憲一郎 1985 『ネパールの歴史—対インド関係を中心に』, 東京: 勁草書房。
- Omissi, David. 1998 [1991]. "Martial Races": Ethnicity and Security in Colonial India, 1858-1939. Peter Karsten (ed.) *Recruiting, Drafting, and Enlisting: Two Sides of the Raising of Military Forces (The Military and Society: A Collections of Essays 1)*, pp. 101-127. New York: Garland Publishing. First published in *War & Society*, 9 (1), 1-27, 1991.
- Pfaff-Czarnecka, Joanna. 1993. The Nepalese Durgā Pūjā Festival or Displaying Political Supremacy on Ritual Occasions. In C. Ramble and M. Brauen (eds) *Proceedings of the International Seminar on the Anthropology of Tibet and the Himalaya*, pp. 270-286. Zürich: Ethnological Museum of University of Zürich.
- . 1997. Vestiges and Visions: Cultural Change in the Process of Nation-building in Nepal. In David N. Gellner, Joanna Pfaff-Czarnecka & John Whelpton (eds) *Nationalism and Ethnicity in a Hindu Kingdom: The Politics of Culture in Contemporary Nepal*, pp. 419-470. Amsterdam: Harwood Academic Publisher.
- Pradhān, Pārasamaṇi & Pradhān, Nagendramaṇi 1983 [1971]. *Thūlo Nepālī-nepālī-aṅgrejī Kosh* (『大ネパール語—ネパール語—英語辞典』). Kālimpoī: Bhāgyamaṇi Prakāshan.
- Ragsdale, Tod A. 1989. *Once a Hermit Kingdom: Ethnicity, Education and National Integration in Nepal*, New Delhi: Manohar.
- Rai, Bhimal. 1997. Baḍā Dashaī ko Shubhākamaṇā (「ダサインおめでとう」). *Parbate*, 49 (6), 13.
- 佐伯和彦 (訳) 1992 「ネパール王国国歌」 辛島昇他監修 『南アジアを知る事典』 東京: 平凡社。p. 863.
- Smith, E.D. 1997. *Valour: A History of the Gurkhas*. Staplehurst: Spellmount.
- 田中雅一 1994 「女神たちの夜・女たちの夜—チダンバラムの九夜祭—」 辛島昇編 『ドラヴィダの世界 インド入門Ⅱ』 東京: 東京大学出版会, pp. 71-82.
- 上杉妙子 (印刷中) 「英国陸軍グルカ旅団の宗教政策—現地人兵士と二つの国家—」, 山路勝彦・田中雅一編 『人類学と植民地主義』 (仮題), 西宮: 関西学院大学出版会。
- Vansittart, E. 1890. *Notes on Goorkhās: Being a Short Account of Their Country, History, Characteristics, Clans & c.* Calcutta: The Superintendent of Government Printing, India.
- . 1915. *Gurkhas* (Handbooks for Indian Army). Calcutta: Government of India.
- Whelpton, John. 1997. Political Identity in Nepal: State, Nation and Community. In David N. Gellner, Joanna Pfaff-Czarnecka & John Whelpton (eds) *Nationalism and Ethnicity in a Hindu Kingdom: The Politics of Culture in Contemporary Nepal*, pp. 39-78. Amsterdam: Harwood Academic Publisher.
- Woodyatt, Nigel. 1922. *Under Ten Viceroy: The Reminiscences of a Gurkha*. London: Herbert Jenkins.
- 山田陽一 1986 「東ネパール, アトパハリア・ライ族のダンナツ・パーフォーマンス」 藤井知昭編 『東西音楽交流学術調査報告Ⅳ—ネパール東部・シッキム民族音楽学術調査 (1984)』, 吹田: 国立民族学博物館, pp. 57-91.
- 山崎 亮 1995 「デュルケーム宗教論における主知主義と主意主義」 『宗教研究』 69 卷 3 輯 (306 号), pp. 14-28.
- 横地優子 1993 「Devīmahātmya における戦闘女神の成立」 『東洋文化』 73: 87-120。

未刊資料

- Brigade of Gurkhas. n.d. *Brigade of Gurkhas Standing Instruction No. 3.67 (BGSi No. 3.67) Religion, Religious Festivals and Holidays*.
- Nehru, J. 1947. *Note on an Interview with F.M. Montgomery on the Employment of Gurkha Troops in the British Army and Other Important Matters*. OIOC L/WS/1/1025, 8 (242)-12 (238).
- Symon, A.C.B. 1947. No title. (A letter to Lt-General His Highness Maharaja Sir Padma Shumshere Jung Bahadur Rana, G. C. S. I., G. B. E., K. C. I. E., Prime Minister and Supreme Commander-in-Chief of Nepal, 7 November 1947. Memorandum of Agreement, 9th November 1947.) IOR L/WS/1/1026.
- Uesugi, Taeko. 1998. *Preliminary Report of "An Anthropological Study on Religion and Socio-cultural Networks among the Gurkha in the United Kingdom (A type-written manuscript submitted to the British Army and the School of Oriental and African Studies, University of London)*. 36p.